

第二話

裏土御門 陰の長者

呪殺 鉄輪の法



虹岡 思惟造

開演時間ちょうどに照明が落とされ、能楽堂全体が暗闇に包まれた。数呼吸する内に、笛の音が静かに鳴り響き、それを合図に舞台の手前の暗闇に明かりが一つ灯る。それはゆらゆらと揺れる蠟燭の灯りであった。

黒子により、他の蠟燭にも次々に点灯されて、次第にその数を増して行き、舞台と橋掛かりの周辺は、揺れ動く淡い明かりで囲まれた。橋掛かりの勾欄やその脇に植えられている3本の松も、揺れる灯りに浮かび上がっている。

舞台の上はまだ暗い影の中にあっただが、照明装置が入って、次第に明るくなり囃子方の姿がようやく分かるほどになってきた。笛の奏者の顔も見て取れるようになった。きりっと引き締まった顔をした、中々の美男子である。

今夜は理紗の芸大時代の同窓生であるこの能管奏者から声を掛けられて、こうして二人して観能しているのであった。能「鉄輪」は安倍晴明(あべのせいめい)を題材にしたものであり、以前から観たいと思っていた演目であったから、諒輔にとっては渡りに船であった。今夜は通常と違い蠟燭能として上演されるのも楽しみであった。

(この笛の奏者が理紗の大学時代の元カレか?) とつい勘繰り、隣に座っている理紗の様子をそっと窺い見た。しかし客席は舞台より更に暗く、理紗の和服姿の輪郭は見えても、表情までは読み取る事が出来なかった。

小鼓、大鼓、それに太鼓なども加わった囃子方による演奏が次第に急調子になって、はたと止み静寂が広がった。

橋掛かりの奥の幕が上がり、貴船神社の社人が登場してきた。能独特の摺足で舞台中央に進み出ると口上を述べ始めた。

「かように候ものは、貴船の宮に仕え申す者にて候、さても今夜不思議なる霊夢を蒙りて候、その謂われは、都より女の丑の刻参りをせられ候に、申せんと仰せらるる仔細、あらたに御霊夢を蒙りて候程に、今夜参られ候はば、御夢想のようを申さばやと存じ候」

社人の口上が終わると、笛の“ぴいっ”と甲高い一声がして、囃子が再開された。その後、笛が鳴り止み小鼓と大鼓が「ようっ」「おうっ」と呼応しながら、緩やかな調子で打ち合っていたが、やがて嫋々たる笛の音色が加わった。同時に橋掛かりの幕が上がり、主人公であるシテが被衣姿で歩み出てきた。橋掛かりの中ほどに至ると歩みを止め、観客の方に向き直り口上が始まった。被衣に隠されて女の顔は未だ見えない。

「日も数ぞいて恋衣、日も数ぞいて恋衣、貴船の宮に参らん」

女は貴船神社に行く道すがら、不実な夫を責めて言い募り、やがて神社に着く。

「通り馴れたる道の末、夜も糺の変わらぬは、思いに沈む御菩薩池(みどろいけ)、生けるかいなき憂き身の。消えん程とや草深き、市原野辺の露分けて、月遅き夜の鞍馬川、橋を過ぐれば程もなく、貴船の宮に着きにけり」

女がやって来たのを見て、社人が話しかける。

「いかに申すべき事の候、御身は都より丑の刻参りめさる、御方にて渡り候か、今夜御身の上を

御夢に蒙りて候、御申しある事は早や叶いて候、鬼になりたきとの御願ひにて候程に、我が家へお帰りあって、身には赤き衣を着、顔には丹を塗り、頭には鉄輪を戴き、三つの足に火を灯し、怒る心を持つならば、忽ち鬼神と御なりあらうずとの御告げにて候、急ぎお帰りあって、告の如く召され候へ、なんぼう奇特なる御告げにて御座候ぞ」

そう社人に告げられるが、女は自分のことではないと白を切る。

「これは思いも寄らぬ仰せにて候、わらわが事にてはあるまじく候、定めて人違へにて候べし」
「いやいや、しかとあらたなる御夢想にて候程に、御身の上にて候ぞ、かように申す内に何とやらん恐ろしく見え給いて候、急ぎ御帰り候へ」

社人は、「恐ろしや、恐ろしや」と叫びつつ、一目散に逃げ去る。

「これは不思議の御告かな、まずまず我が家に帰りつつ、夢想の如くなるべし……」

女は始めてここで被衣を脱ぎ、泥眼の面を付けた顔を現す。地謡が女のその後の変化を描写する。

《言うより早く色かわり、気色変じて今までは、美女の容(かたち)と見えつる、緑の髪は空(さか)さまに。立つや黒雲の、雨降り風と鳴神も思う仲をば離けられし、恨みの鬼となって、人に思い知らせん、憂き人に思い知らさん》

女は美女から鬼に变ずる様を表現しつつ、走るようにして橋掛かりから奥に消える。



前場が終わると、シテの相手役であるワキの登場を告げる囃子事がある、女の前夫が先ず登場し、次に安倍晴明が現れる。前夫は素袍上下に熨斗目の装束、晴明は、風折烏帽子に狩衣姿である。後場の場面は、最初が安倍清明の屋敷であり、途中から下京辺りの男の屋敷に移る。最後に鬼女が登場し、以下のように展開して行く。

女の前夫は、連夜の悪夢に悩み、著名な陰陽師の安倍晴明を訪れ、晴明から原因は別れた女の呪詛であり、今夜にも命が尽きるであろうと告げられる。男は驚き、晴明に命乞いをする。晴明はこれを受けて男の屋敷に出向く。

晴明は祈祷のための高棚に男女の形代、御幣などを用意し祝詞をあげる。

「それ天開け地固まつしよりこの方、イザナギ・イザナミの尊、天の磐座にして、みとのまくばいありしより、男女夫婦の語らいをなし、陰陽の道長く伝はる、それに何ぞ魍魎鬼神妨げをなし、非業の命を取らんとや」

晴明が祈祷をすると、神々が呼応して雷鳴稲妻が激しく起る。

そこに鉄輪を頭に戴き、打杖を手にした鬼女が現れる。頭に乘せた鉄輪の脚に火を灯すと呪詛を吐く。生成(なまなり)の面が実に不気味である。

「恨めしや御身と契しその時は、玉椿の八千代、二葉の松の末かけて、変わらじとこそ思いしに、などしも捨ては果て給ふらん、あーら恨めしや」

女は浮気男の命を奪おうと「いでいで命を取らん」と近付き形代に打ちかかる。しかし、晴明が設えた高棚の御幣に神仏が宿っていて命を奪うことが出来ない。

「殊更恨めしき」と呟き、無念の想いを込めて舞うと、姿は消え去って行く――――



鬼女が舞台の奥の暗がり姿を消した。ややあって、客席から拍手が湧き上がり、蠟燭能「鉄輪」は終演した。

理紗は能管奏者の友達に挨拶してくると楽屋に行ったので、諒輔はロビーで待つことにした。椅子に座り、精神を集中して始祖晴明公の記憶を探った。鉄輪に関する記憶があるかも知れないと思いついたからだ。しかし、何しろ千年も前の記憶である。探るのに難渋したが、鉄輪のストーリーと実によく似たものが記憶に残されていた。

陰陽師として名高い晴明は、貴族や有徳人に請われて護符を与えたり、その屋敷に赴いて祈禱したりして呪詛から身を守る仕事を時折していた。そんな頼まれ仕事の一つに、離縁した先妻の呪詛から守って欲しいというものがあったのだ。その記憶とは以下のようなものであった。

ある時、晴明のもとに連夜悪夢に苛まれ、食事も喉に入らぬほど衰弱してしまった男が訪れてきた。晴明は男の話聞き、祈禱し卦を立て悪夢の原因を探ったところ、先妻の呪いによることが判明した。この男に掛けられた呪詛の力は強力で、このままでは今日明日にも命が尽きてしまうことが分かった。男は晴明に何とか助けて欲しいと懇請するので、晴明はその男の住む屋敷に出向く。

その晩の丑三つ時、脚に火を灯した鉄輪を被った女が現れた。この姿を見た晴明は呪詛の中でも最も強力な“呪殺鉄輪の法”によるものであることを知り愕然とする。この法は晴明の他に知る者は、あの蘆屋道満しかいないはずであったからである。蘆屋道満は晴明の最大の宿敵であり、陰陽師として晴明と互角の力を競い合っていた。

晴明は鬼女と化した先妻と闘い屈服させ、女に問い質した。女曰く、丑の刻参りをしても効験が現れないので、呪詛に長じた陰陽師として知られた道満に会って最も強力な呪詛の法を教える欲しいと嘆願した。好色な道満は女が身を任せるならば、鉄輪の呪詛を授けると云い、女はこの

条件を飲み、この法を己がものにしたのだと告白する――――

能の鉄輪と晴明の記憶との相違点は、呪殺の法を、能では貴船神社の祭神から授かったとするのに対し、晴明の記憶は蘆屋道満が女に授けたとする点であった。しかしその他は、非常に似通っており、この晴明の記憶の話しがベースになって伝説が生まれ、能になったと考えられた。なお、晴明も呪殺の能力を有していたことは今昔物語の以下の文章からも明らかであった。

また、この晴明、広沢の寛朝僧正と申しける人の御坊に参りて、もの申し承りける間、若き君達・僧どもありて、晴明に物語などしていはく、「その識神を使い給うなるは、忽ちに人をば殺し給うらむや」と。

晴明、「道の大事をかくあらわにも問い給ふかな」と言ひて、「安くはえ殺さじ。少し力だに入れて候へば必ず殺してむ。虫などをば塵ばかりのことせむに必ず殺しつべきに、生くようを知らねば、罪を得ぬべければ由なきなり」など言うほどに、庭より蝦蟇の五つ六つばかり踊りつつ池の辺りさまに行きけるを、君達、「さは、あれ一つ殺し給へ。試みむ」と言ひければ、晴明、「罪造り給う君かな。さるにても試み給わむとあれば」とて、草の葉を摘み切りて物を読むようにして蝦蟇の方へ投げ遣りたりければ、その草の葉、蝦蟇の上にかかると見けるほどに、蝦蟇は真平にひしげて死にたりける。僧どもこれを見て、色を失ひてなむおぢ怖れける――――

しかし、この呪殺の力は余りにも禍々しく不吉であったため、晴明は裏土御門の系譜に繋がる者にも伝えようとしなかったのである。裏土御門が鬼道に堕ちるのを未然に防止したのであろう。

「お待たせ」

理紗が戻って来たので、諒輔は記憶を探るのを止めた。

「早かったね」

「人を待たせているからって言って早く帰って来たの」

理紗はクスリと笑い「彼ったらね、『待たせているのは恋人かって』聞くから『そうよ』って答えたの」

諒輔は満更でもなく、内心にんまり笑うが表面は平静を装う。

「そうしたら彼がね『そいつに伝えとけ』って言うの……聞きたい？」

「どうせろくなことじゃないんだろう？」

「彼はこう言ったの……『俺はまだ理紗のこと諦めたわけじゃない』って」

理紗は嬉しそうに「じゃ、帰ろうか」と言いつつ諒輔の腕に自分の腕を絡めた。

第一章 八重山諸島神坐村

石垣島直行便の機内から、諒輔と理紗は眼下に広がるコバルトブルーとエメラレドグリーンで彩られたサンゴ礁の海を眺めていた。今日は六月十八日、梅雨が明けた八重山地方は快晴で絶好の飛行日和であった。

着陸するため、機体はかなり降下している。サンゴ礁に当たって砕ける白い波まではっきりと見ることが出来た。理紗はそんな景色を着陸するまで眺めて「綺麗！」「すてき！」など、感嘆の声を連発していた。



石垣島空港に着陸すると、荷物受取所のカウンターから旅行ケースをピックアップした。今回は父の正剛（せいご）の結婚式に参列することが主な目的であり、2週間の長期滞在を予定していたので、二人とも海外旅行用の大型ケースを持ってきている。カートに積み込み出迎えロビーに出ると、アロハシャツを着た若い男性が歩み寄って来た。

「諒輔さんと理紗さんですね」

そうだと答えると「始めまして、“ヴィラ星の砂”の金城拓馬です。東神坐島(ひがしかむざじま)まで案内します」と日に焼けた顔で笑いかけて来た。

「どうぞ、こちらです」

拓馬はカートを諒輔から奪うと、タクシー乗り場に向け、足早に歩き始めた。石垣島の日差しは強く、理紗は日除け用の大きな帽子を被っている。それが白いリゾートウェアに良くマッチしていた。諒輔は持参してきたサングラスを掛けたが、流行遅れの代物だったからか、あるいはサングラスそのものが似合わないのか、理紗に笑われてしまった。

石垣港の離島ターミナルでタクシーを降りる。東神坐島に行く為には、ここから船に乗らねばならない。夏休み前で観光客はまだ少なく、待合室のベンチに座る人はほんの僅かであった。出発まで少し時間があるので拓馬に父の様子を聞いてみることにした。

「父は元気しておりますか？」

「先生は元気さあー、なんせ結婚相手は二十歳以上も若い人ですから」

「そりゃそうだけど……でもそんな若い人とどこで知り合ったのだろう」

父の結婚式に参加するためにやってきたのに、その相手がどんな人か、全く知らされていなかったのである。

「あいえなー！ そんなことも知らないでやって来たんですか？」

「お父様は照れていらっしゃるのよ。息子にはそういったこと、話し難いものじゃないかしら」

理紗の言う通りかもしれない。六十歳で再婚するのである。結婚するに至った経緯を、息子

に一々説明するのは気恥ずかしいだろう。

「先生が石垣島の県立病院に勤めていた時に知り合われたそうです。富紀さん、あっ、先生の奥さんのことですが、そこで看護師をされていたと聞いています」

父が知り合うとすれば、そんなところだろう。

「先生は籍だけ入れれば良いと、言っておられたようですが、神坐村の連中が、何が何でも結婚式を挙げるのだと騒ぎ立てて、それで先生も仕方なく……」そこで拓馬は腕時計を見て「ああ、そろそろ時間です。乗り場に行きましょう」と腰を上げた。

諒輔と理紗がこれから訪れる神坐村は、東神坐島と西神坐島、それに幾つかの無人島で成り立っていた。村役場は琉球王朝時代から開けていた東神坐島に置かれており、正剛が勤める村立診療所も東神坐島にある。

西神坐島は、海拔四百メートル級の山がある島であり、海岸は断崖絶壁が続き、全体が熱帯のジャングルで覆われていた。そのため、開けた平地が少なく、港もごく限られた場所にしか無いことから、開発が遅れていた。

東神坐島は観光の島でもある。住民は千人にも満たないが、年間の観光客は三十万人にも及ぶ。島の北部には、石垣と屋敷林に囲まれた赤瓦屋根の民家が建ち並ぶ昔ながらの農村集落が残っていた。その集落を水牛車に乗り、見て回るとというのが、この島の最大の観光の売りであった。別の観光施設としては、島の南海岸にポルトガル村というテーマパークがあるが、人気がなく、今や閉園寸前といった状態であった。

石垣島に近いので、これほど多くの観光客が訪れるのだが、ほとんどの観光客は水牛車で一周りすると帰ってしまい、宿泊する客が少ないのが悩みの種であった。

高速船に乗り、二十分もすると東神坐島の北港に到着する。船を降りて拓馬の案内で栈橋を進む。拓馬は待ち受けていた数台のマイクロバスの一つに、諒輔と理紗を案内した。バスの前に若い娘が待っている。

「めんそーれ、東神坐島にようこそ」と少し恥ずかしそうに言って拓馬に近寄った。

「結衣さんです。診療所の事務をしています」

拓馬が紹介する。二人は寄り添うようにしている。どうみてもこの二人は恋人同士だ。

「診療所に先に行かれますか、それとも宿にしますか？」

諒輔は宿で寛いだ上で、父の診療所に行きたかったが、理紗が「先ずはご挨拶でしょう」と至極もったもんな見解を示したので、素直に従うことにした。旅行ケースは拓馬が、“ヴィラ星の砂”に運んでくれるとのことであった。

父、三輪正剛が所長をしている村立診療所は北部の集落近くにあり、所長の他は、看護師と事務員の結衣がいるだけであった。診療所の建物はコンクリート造りの平屋で外壁が白く塗装されており、南国の青い空に映えていた。

結衣が診療所内に先に入り声を掛けると、白衣を着た看護師らしき女性が出て来た。一瞬この

人物が父の結婚相手の富紀かと思ったが、よく見れば中年太りした五十歳台とおぼしき女性である。

「遠いところをよくお越し下さいました。先生は今、診察中で……いえ、患者はいつものおばあですからすぐに終わります。さ、どうぞ中にお入り下さい」

待合室に通されしばらくすると、診察室のドアが開いて、一人の老婆が出て来た。その後ろ姿に向かって正剛が声をかけている。

「薬を毎日きちんと飲まなきゃ駄目だよ」

老婆は聞こえているのか、聞こえていないのか、返事をせずに待合室の椅子に腰かけた。

結衣がそんな老婆に声を掛ける。

「おばあ、先生が何時もああ言って下さるでしょ。薬、毎日飲まなきゃいけないよ」

「わんや他ちゅが造った薬(くすい)や飲まねーんぞ。ユタや、薬は自分で作るもんじゃ」

結衣は困った顔をして、諒輔と理紗に老婆を紹介する。

「私の祖母です。島のユタをしているんですが、薬を飲みたがらなくて……」

ユタとは沖縄地方に古くから伝わる霊能者であり、神が憑依してお告げをする霊媒者であった。

結衣はおばあの手をとり出口まで見送る。

「いやあ、すまん。待たせたな……おっ、こちらが理紗さんか」

診療室から白衣を着た正剛が現れ、理紗を見て、満面の笑みになった。身長は諒輔ほど高くないが、六十歳にしては長身で、贅肉の無い引き締まった身体つきである。頭髪は白髪が目立つが、日に焼けた顔と良くマッチしている。

諒輔が理紗を紹介し、理紗が挨拶を終えたところで諒輔は肝心なことを聞いた。

「ところで父さん、花嫁を紹介して貰えないかな？」

理紗も「うん、うん」と頷き正剛の顔をじっと見る。

「富紀は今頃、家でお前達を迎える準備をしている筈だ。俺はもう少しここに居なければならぬので、お前達、先に家に行って待っていてくれんか」

自宅は歩いて十分位ということなので、結衣に案内して貰って行くことにした。

正剛の自宅は昔ながらの伝統的な赤瓦の民家で、石垣と南国の木々に囲まれていた。入口近くにはノウゼンカズラが、庭にはハイビスカスが咲いており、南国情緒を醸し出している。

結衣が開け放たれている座敷に身を乗り入れるようにして、声を掛けると奥から「はあーい」と応答があり、富紀と思われる人が、エプロンを外しながら縁側に出て来た。

「よくいらっしゃいました。お迎えにも行かず失礼しました。どうぞあちらの玄関からお上がり下さい」

示された右側に玄関があり、入るとそこは広い土間になっていた。靴を脱ぎ座敷に上がり、初対面の挨拶が交わされた。色白細面で和服が似合そうなタイプの人である。結衣の話によれば富紀は秋田出身であるらしい。



正剛が六時過ぎに帰って来て、シャワーを浴び、甚平に着替えると早速に酒宴が始まった。諒輔は父から借りた甚平姿、理紗は富紀から借りたムウムウを着ている。

狭い島のことである。診療所の先生の息子とその恋人が島にやって来たことは、瞬く間に島中が知るところとなっていた。酒宴は身内だけで行われる筈であったが「先生！ 味くーたー魚持ってきたよ」「あきさみよー！ 美人(ちゅらさん)ちゅやんやー」など口々に言いつつ次から次に、島人がやってくる。そして勝手に上がり込むと酒盛りに加わった。そんな勝手組の一人に拓馬の父の金城真俊がいて、正剛と富紀の前に座り込んで盛んに話し込んでいる。真俊は“ヴィラ星の砂”の社長で、結婚式の進行段取りを全て任されている人物だ。

訪れる人は大人だけでなく、子供たちも縁側の近くにきて中を覗き込んでいる。三線を持ち込んだ者が弾き語りを始めると、座敷の人々は次々に立ち上がり踊り始めた。三味線の専門家である理紗は三線に興味を持ったらしく、三線を持つ男の近くに行き、その手元を繁々と眺めている。

酒宴は延々と続くようであった。諒輔は時期を見計らい理紗を外に誘った。二人手をつなぎ、教えられた道を海岸に向かって歩いて行った。夜風が酒に酔った身体に心地良い。行く手から波の音が聞こえて来る。蘇鉄の灌木を抜けると、そこが海岸で、空を見上げると満天の星が輝いていた。

「あれが天の川なのね」

夜空に横たわる壮大な星の流れに、理紗はうっとりとしている。

「うん、すごい星の数だね」

「もうすぐ七夕、織姫は一年振りに彦星に会ったら最初に何て言うのかしら？」

「そりゃ決まっているよ」

「そうなの……何て？」

「ハイサイ！」

ハイサイとは沖縄方言で『元気にしてる？』という意味に使われる言葉である。

「諒輔ったら……」

二人は肩を寄せ合い砂浜に座り、波の音に耳を澄まし、そして夜空を見上げた。

流れ星が天空を斜めに走って消えた。

ムード満点のシチュエーションである。諒輔はキスをしようと、目を閉じ理紗に顔を近づけた。

「諒輔、こんな素敵な景色、犬麻呂と牛麻呂にも見せてやりたいわね」

突然話しかけられて、諒輔はあたふたした。

「そ、そうだね……」

キスをし損ねたのは残念だったが、理紗の言う通りだと思い直した。

「分かった、あの二人にも見せてやろう」

諒輔は呪を唱えて、犬麻呂と牛麻呂を呼び出した。

「はら、見てごらんなさい、あれが天の川よ」

現れ出た二人の式神に理紗がやさしく声をかけている。安倍の血筋がなせる業であろうか、最近、理紗も式神の姿が半透明位には見えているようだ。

犬麻呂と牛麻呂は夜空を見上げ「ほう！」「おう！」と感嘆の声を上げた。しかし夜空を見るのはすぐに飽きてしまったようで、二人は波の音に誘われて、波打ち際に行った。最初はおっかなびっくりして波が寄せると逃げていたが、そのうちに馴れたらしく、寄せては返す波と戯れて飽くことを知らなかった。

第二章 結婚式

翌十九日も島は快晴であった、諒輔と理紗が宿泊している“ヴィラ星の砂”は、美しいビーチとして有名な星の砂海岸にあった。父の結婚式は、明日に行われる予定になっていたもので、今日一日は自由に南国の海を満喫できると諒輔と理紗は楽しみにしていた。

宿舎は沖縄民家を模したコテージ風の独立家屋であった。遅めの朝食をメイン棟のレストランで済ますと、諒輔と理紗は、少し離れた所にあるサンゴ礁が綺麗なポイントに行き、シュノーケリングに挑戦した。インストラクターは拓馬である。

理紗は日焼けとすり傷防止のために、ラッシュガードを身に着けており、ビキニ姿を期待していた諒輔にとって思惑外れであった。シュノーケリングは二人とも、初めてであったが、直ぐにコツを掴み、海面から海の中の様子を見ることが出来るようになった。色とりどり、形状も様々なサンゴ礁とカラフルな熱帯魚の美しさに感動しきりであったが、拓馬に言わせれば、こんな所はほんの序の口で、もっと素晴らしいポイントが沢山あるとのことであった。



結婚式当日の六月二十日も快晴で、予定通り式の会場は“ヴィラ星の砂”のメイン棟の前の芝生広場で行われることになった。この広場は高台になっているので、檳老樹の茂みの向こうに海を一望することが出来た。今日の式進行を任されている真俊は、朝から会場の設営やら料理の手配など大忙しである。

今日の結婚式は、正剛のたつての希望で、ユタによる儀式で執り行われることになっていた。その大事な司祭役は、結衣のおばあであるユタの咲江に依頼してあった。咲江は先ほど到着し、今、控室で、孫の結衣に手伝わせてユタの正装に着替えている筈であった。

日本の西端に位置するこの島は陽の入りが遅い。開宴は午後七時半からとしていたが、その一時間も前から、人が集まり始めていた。

開催時間近くになると、辺りは漸く薄暗くなり始め、広場の周囲に配置されたガス灯に火が灯された。広場の端に祭壇が設けられており、その前の莫座に白いユタの装束に身を包んだ咲江が座った。その後ろの莫座には正剛と富紀が座る。正剛はかりゆしウエアを着て胡坐をかき、富紀は白いワンピースに花の髪飾りを付け座っていた。

すでに芝生広場は人で溢れかえっていたが、司会の真俊がマイクで静粛を呼び掛け、これから式が始まることを皆に告げた。それまで騒がしくおしゃべりに興じていた人々は正剛と富紀の後ろに集まり、神妙な顔をしてユタの儀式を見守った。

式が無事に終了すると、人々は広場のあちこちに置かれている丸テーブルに戻った。中央のメインテーブルには、正剛と富紀が座り、同じテーブルの客たちと笑顔で話している。そのテーブ

ルには、村の名士と思われる人に混じり、ユタの咲江も座っていた。

諒輔と理紗はそこから少し離れたテーブルで、診療所の看護師や結衣などと一緒であった。拓馬は父の指示に従い、他の従業員に混じって忙しく立ち回っている。

皆が納まる処に収まったのを見届けて、真俊がマイクで話し始めた。

「大変お待たせしました。それではただ今より披露宴を開催します」

「待ってました！」などの声が掛けられ、拍手が沸き起こる。

「改めてご報告します。先ほど、皆様が見守る中、厳かに式が執り行われ、先生と富紀さんは目出度く結婚されました」

「おめでとう！」「先生お幸せに！」などの歓声と盛大な拍手、そして指笛が鳴る。

「それでは、皆さん飲み物の用意はいいですか？」

皆に飲み物が行き渡るのを見届けると、「乾杯（かりーさびらー）！」と声を張り上げ、グラスを高く掲げた。

乾杯が済むと、飲食と談笑が始まったが、しばらくすると村の名士たちの挨拶になった。村会議員や、漁業組合、観光協会の幹部などが次々に祝いの言葉を述べる。熱心に聞く人はほとんどおらずに野次が飛ぶ。

「挨拶ちやいらねーんぞ！」

「村長はどうして来ねーんだ？」

「そうだ、そうだ！ 賛成派や一ちゅも来らーじゃねーんか」

諒輔は隣の結衣に「賛成派って何ですか？」と問いかけた。

「隣の島で、リゾートホテルを建設中なんです。でもその建設を巡って賛成派と反対派がこの数年ずっといがみ合っているんです」

その話なら以前、マスコミでも取り上げられたので、諒輔も理紗も記憶に残っていた。日本初の本格ジャングルリゾート建設というのも話題だったが、環境破壊をおそれる各種団体が反対運動を起こし、それがマスコミの格好の的として報道されたのだ。しかし、反対派が起こした建築差止訴訟が敗訴すると、マスコミはいつしか取上げることをしなくなったのであった。

「ふーん、その賛成派が一人も出席していないの？」

「ええ、村長が賛成派の筆頭なんだけど、村長はもちろん、一人も……」

結衣の説明によると、今日、ここに集まっているのは、ほとんどが反対派の人ということであった。それと言うのも、村の観光協会長を務める真俊が、反対運動の急先鋒であり、正剛も反対運動の発起人に名を連ねていることがその理由らしい。反対運動のもう一方の旗頭である漁業組合長は、正剛の結婚式をととても楽しみにしていたが、ここ数日來の体調不良のため今日は出席していないとのことであった。

沖縄の結婚披露宴と言えは余興である。次々に余興が披露されて行き、呼び物のエイサーが始まって宴は最高潮に達していた。エイサーは若者たちが太鼓を打ち鳴らしながら踊る迫力あるもので、最近の結婚式の余興に欠かせない演目になっていたのだが、その演舞の最中に広場の後方で悲鳴が上がった。最初、賑やかなエイサーの太鼓の響きで、気付くのが遅れたが、悲鳴は瞬

く間に広がった。エイサーを踊っていた者たちも異常を感じて動きを止めた。

何者かが襲って来たらしいと諒輔は直感した。皆を守らねばならない。急ぎ呪を唱えて犬麻呂、牛麻呂を呼び出した。現れた二人の式神に、襲撃から守るように下知すると、悲鳴の中心と思われる方に駆けよった。

そこには、ウエットスーツ姿の男が何人もいて、手にした棒で手当たり次第、逃げ回る人達を殴りつけていた。諒輔は、そんな一人の右腕を捻り上げると、棒を奪い、後に続く理紗に手渡した。武器を手にした理紗が、強力な戦力になることを先刻承知していたからである。ウエットスーツ姿の男達は総勢十五、六名ほどいたが、諒輔と理紗それに式神達の反撃に会い、瞬く間に叩き伏せられてしまった。

「ひきあげろ！」

襲撃者たちの中のリーダーらしき男が叫ぶと、ほうほうの体で逃げ出した。男達は海岸に辿り着くと、浜に引き上げてあったゴムボート二隻を海に押し出し、分乗すると船外機を海中に入れてエンジンを作動させ、暗い沖に向け走り去って行った。

第三章 ジャングルリゾート「KAMZA」

正剛と富紀の披露宴は大変な幕切れとなった。正剛と富紀、それに看護師と結衣は診療所に戻り、怪我人の手当てに夜遅くまで当たった。幸いにして皆軽傷だったので、怪我人たちは、それぞれ自分の家に帰って行った。

また、襲撃事件があった後、島の駐在が自転車で駆け付け、被害状況や犯人の遺留品などを調べていた。諒輔はその様子を見ていたので、駐在に聞けば犯人のことが分かるかもしれないと思い、翌二十一日の午後、駐在所を訪ねてみた。

駐在は六十歳前後、人の良さそうな顔で諒輔を迎えた。諒輔が名乗る前に、誰であるか察してこう切り出した。

「昨夜は、大変なご活躍のようで、皆な感謝しとりました」

「いやそれほどのごことはしていません。駐在さんこそ、夜遅くまで調べておられたようで、お疲れでしょう？」

「ええ、まあ、酒飲んで寝ていたら事件だって電話で叩き起こされて駆け付けたものから……」

「それは大変でしたね。ところで犯人の目星は付きましたか？」

「それが暗い上に、皆同じウエットスーツ姿なので、人相やら、何やら、良く判らないと皆が言うのです」

そうであった。襲撃してきた者達は、全身を覆う黒いウエットスーツを着ていた。

「でも、その黒いウエットスーツに見覚えがあるという者がおりましてね……」

駐在は、そこで声をひそめた。

「ポルトガル村の宿泊施設に泊っている者たちが、あの黒いウエットスーツを着て、海で何やら訓練のようなことをしていたと言うんですな」

その宿泊施設はリゾート開発会社が買い取って、現在は建設作業員などの宿舎に使われているらしい。

「そこまで分かっていたら本署の協力を得て、一斉検挙出来るんじゃないでしょうか？」

「いや、中々そうは行きません。彼等が襲ったという証拠らしい証拠がないのと、まあ色々ありまして……」駐在は後の言葉を濁した。

諒輔が“ヴィラ星の砂”に戻り、駐在の話しを真俊にすると、「ご存じのようにこの村は、村長がリゾート賛成派の上に、村議会も賛成派が過半数を占めています。リゾート関係者と村の執行部は今や仲間内のようになっているので、警察としてもよほどの証拠を集めないと彼らには手が出せないので」と苦渋に満ちた顔付きをした。

真俊は良い機会ですからと前置きし、村の議会が賛成派に過半数を握られてしまった経緯を話し出した。

「諒輔さん、理紗さん、幽霊住民というのを知っていますか？」

諒輔は少し考えて答える。

「確か、移住してきたけど、住民票は元のままにしておくと言う住民のことじゃなかったかな」
「その通りです。沖縄移住ブームとかでこの島にもかなりの数の移住者がいるのですが、中々住民票を神坐村に移転しようとしませんのですよ。こう言う手合いは沖縄移住者に特に多いそうだけど、村に税金を納めないで大変困るんです」

そういう話は何時か、新聞で読んだ記憶がある。

「ところがリゾートの建設が始まると、その関係者が多数、島に移住してきて住民票を神坐村に移したんです。さらにリゾート会社に関連する宗教団体の信者も移り住んできて、同じように住民票を移転しました。村は税収が増えると、最初は皆喜んだのですがね」

真俊は欧米人のように肩をすくめて見せ、また話を続ける。

「気がついてみると、神坐村の人口は急激に増えて、千人近くになっていました。リゾート建設が始まる前は八百人位だったから一挙に200人も増えた勘定です」

諒輔と理紗は頷きながら聞いている。

「村会議員の定数は八名です。以前はリゾート賛成派が三名だったのに、新しく転入してきた者達が押す議員が当選したのだから賛成派が五名、反対派は三名と逆転してしまつたのです」

諒輔と理紗は成るほどそういうことかと興味深く話を聞いていたが、リゾート建設に纏わる更に詳しい経緯を知りたいと思い、真俊に説明を求めた。

リゾート建設は、十年程前、東京のある会社が、西神坐島に研修施設を作ろうと計画したことが発端であった。猛烈研修で有名なその会社は、密林の中に建てた研修施設で、サバイバル的な研修をすることを目論んだが、交通の便があまりに悪いこともあり、別の場所に研修所が建設され、西神坐島の計画は白紙に戻った。しかしそれから三年後に、今度はリゾートホテルとして開発する計画が打ち出され、その開発運営会社として、株式会社K A M Z Aが設立された。



地元はその計画が伝わると、賛成、反対の議論が沸き上がり、マスコミを巻き込み大変な騒ぎに発展した。しかし、反対派が提訴した各種の裁判が敗訴に終わり、村の議会も賛成派が多数を占めると、建設は一挙に本格化し、今や建物と付随設備のほとんどが完成しており、後は備品・調度品の運び込み程度が残されるばかりとなっている。

しかし、反対派は事ここに至っても諦めず、漁業組合が西神坐港の使用制限と漁業補償を申し立て、開業寸前でかろうじてストップが掛っている状態となっている。

開発運営会社のK A M Z Aは、多額の借入金で開発資金を賄っており、開業がずれ込むことは大きな痛手であった。最近では成り振り構わずに反対派懐柔を進めており、どうしても言うことを聞かない者に対しては、暴力紛いの行為もなされている。昨夜の襲撃は、反対派に対する威嚇、示威行為に他ならない。また、治安は島に一人の駐在がいるだけであり、村の行政もリゾート関係者のする事には、見て見ぬ振りなので、彼等の手口は益々エスカレートしており、今後が大変

心配される――――

聞き終えた諒輔は気になったことを質した。

「KAMZAの親会社は何と言う名前かご存知ですか？」

真俊は少し考え込む風であったが「たしか、シュウコンサルタントとか言う名前の会社と記憶していますが……」心もとなげに答えた。

諒輔は自分の思いが的中して（ああ、やはり）と心の中で呟いた。

「それ、シュラ・コンサツタンツじゃない？」理紗も驚いたように叫ぶ。

「そう言われてみれば、確かにそのような名前でした」

「それでは、KAMZAの社長はどのような人か分かりますか？」

「鮫島至道という者です。至道は親会社の元取締役ですが、道真神威教（どうましんいきょう）という新興宗教団体の教主でもあるようです」

鮫島という名前は心当たりがあった。シュラ・コンサルタンツの研修広報担当をしていた女性が確か鮫島と名乗っていた。

宗教団体のことなどについて更に訊ねたが、真俊はそれ以上のことは良く知らないらしく、「仕事があるので」と説明を切り上げた。そして「漁業組合長の容態が益々悪くなっていることが心配だ」と言い置いて仕事に戻って行った。

諒輔と理紗は自分達のコテージに戻ると、真俊から聞いた話を改めて検討した。

「西神坐島のリゾート開発にシュラ・コンサルタンツが絡んでいるとなると、事は単純ではなさそうね」

理紗はテラスの椅子に座ると、素足の脚を組んで諒輔に問いかけた。今日の理紗はキャミソールにショートパンツという思いっきり南国向けのスタイルである。

「ああ、背後に怪しげな宗教団体が見え隠れしているし、彼等は何か企んでいるに違いない」

諒輔は冷蔵庫から、缶ビールを二つ取り出すと、一つを理紗に渡して椅子に座った。日焼けした腿の裏がひりひりと痛む。ラッシュガードを着ずに、シュノーケリングを長時間した報いである。

「彼等の企みって何かしら？」

「さあ、まだよく分からない。だけど、反対派に対する彼等の手口がエスカレートしているので、何とか手を打たないと」

「そうね、金城社長も今後が心配だって言ってらしたわ」

「もっと、詳しい情報があれば、手の打ち様があるのだけど……」

「それなら、葛城さんや神崎さんに相談してみたら？」

「そうだ、そうしよう、警察庁の日野さんが情報を掴んでいるかも知れない」

諒輔は缶ビールのプルトップを勢いよく開けると、喉を鳴らしてビールを飲んだ。暑い日差しの中を駐在所まで行ってきたので、喉が渴いていたのだ。

第四章 道真神威教

翌二十二日、葛城が警察庁の日野から得た情報を電話で伝えてきた。そして報告の最後に神崎を東神坐島に派遣したいと申し出た。

「至道が率いる道真神威教は、危険な狂信者団体として、警察庁でもマークしているそうです。今後、また襲撃などが考えられるので、神崎をそちらに行かせたいと思います。警察庁の日野さんから入手した資料を持たせるので、詳しい事は神崎からお聞きください」

諒輔は承知した。戦鬪のプロの神崎が来てくれることは心強いことであった。

神崎はその日の深夜便で羽田を立ち、翌二十三日の午前十時頃、東神坐島の“ヴィラ星の砂”に到着した。さてその出で立ち、半袖迷彩服にレイバンのサングラス、頭にはグリーベレー、足元は頑丈な軍靴で固め、大きな布製のバッグを背負っている。軍事オタクも極まれりといったところだが、そこは元自衛隊の特殊部隊出身者である。さすがに、その姿は板についている。

神崎は、自分の部屋に荷物を置くと、両手に図面や書類ファイルを抱えて、諒輔と理紗のコテージを訪ねてきた。待ち構えていた諒輔と理紗は挨拶抜きで質問を開始した。

「到着早々でお疲れのところ申し訳ありませんが、幾つか質問していいですか？」

「勿論です、そのために私はやってきたのですから」

神崎は疲れを感じさせない元気な声で答える。

「ではまず、シュラ・コンサルタントがその後どのようなようになったか聞きたいのですが」

「はい、分かりました」と答えて神崎は説明を始めた。

月暎は諒輔との鬪いで一命は取り止めたものの失明し、社長の退任を余儀なくされた。その後任には鮫島穂来が就任した。カリスマを失って同社の業績は一時悪化するが、人材派遣事業を中心に据えた穂来の経営戦略が功を奏し、今では従前にも増して発展を続けている。なお警察庁は、同社子会社の箱根の工場に対して、別件の薬事法違反容疑で強制捜査に踏み切ったが、サリン製造の証拠はすでに隠滅されており摘発は不発に終わった――

「そうか、確かに鮫島という女性はやり手だったからなあ。ではと……その兄の鮫島至道とはどんな人物なんでしょうか？」

神崎は頷くと、持参した書類ファイルの一つを手に取り、該当するページを探していたが、見つかったらしく説明を始めた。

「至道は蘆屋道満の血を引く家系の人物です。この家系は代々、阿修羅教団で主要な地位と任務を担っていました」

「えっ、蘆屋道満ですって？ あっ御免なさい、話の途中で」

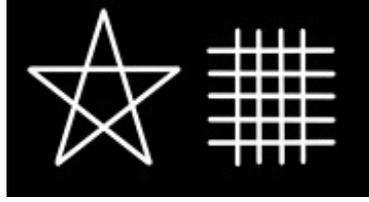
「理紗様は蘆屋道満を御存じのようですね？」

「あ、いえ、詳しくは知りません。ただ道満が清明公のライバルで、清明公と並び称されるような大陰陽師であったと言うことだけは知っていますが……」

理紗は話しの腰を折ったことを恐縮して、何時になく小声で答えた。

「蘆屋道満については、僕から説明しよう。神崎さんいいですか？」

神崎の了承を得て諒輔は説明を始めた。



蘆屋道満は、色々な伝説に彩られた謎めいた人物であるが、実在の人物である。播磨の国の地付きの陰陽師だったが、自分の呪術力に自信があり、野心家でもあったので、京に上り、有力な公家であった藤原顕光に取り入って、そのお抱え陰陽師になった。顕光は当時、右大臣であり、朝廷ではナンバーツーの地位にいた人物であった。道満としては破格の出世である。そのころ晴明は朝廷ナンバーワンの左大臣藤原道長の厚い信頼を得ていた――

「ふーん、読めて来たわ、ナンバーワンとナンバーツーによる権力闘争に陰陽師が巻き込まれたのね」

「その通りなんだ。顕光は実力ではとても道長に敵わないと知り、道満に命じて道長に呪詛をかけた。それを晴明公が見破り、道満は播磨に流されてしまったというのが史実に基づく話なんだよ」

「神崎さんは先ほど、至道は道満の血筋と言われたけど、子孫はいたのかしら？」

神崎が返答に困っているのので、諒輔が答える。

「室町時代の播磨の地誌である峰相記が、その後の道満に関する話を伝えているんだ。それによると、道満の子孫が瀬戸内の英賀・三宅方面に移り住み陰陽師の業を継いだとあるから、至道はその系譜に連なる者じゃないかな」

「よく分かったわ、神崎さん、話の途中で済みませんでした。続きを聞かせて下さい」

理紗は神崎に説明の再開を頼んだ。神崎は頷くと説明を続けた。

蘆屋道満の血筋を引く家系の者は、道満から伝えられた強力な呪殺の法を身につけており、阿修羅教団の内部でも一目置かれる存在であった。至道の母のサイは特に呪祖の能力に長けており、一時は阿修羅教団のトップに君臨していた。しかし月暎の台頭により、その地位を奪われ、サイは引退した。その代わりに、長男の至道とその妹の穂来が阿修羅教団の幹部として残った――

「至道はサイから甘やかされて育ったらしく、大変我儘な性格で、月暎等の反対を押し切りサリンの製造を行い、その責任者となったそうです。しかしそれが当局の察知することになったので、月暎は証拠を隠滅するため、子会社の製造設備を取り壊しました。それに猛反発した至道は別の場所でサリンを製造しようと企んだのです」

「それが、西神坐島のリゾート施設なのね？」

「そうです、至道はシュラ・コンサルタンツや阿修羅教団には内緒で、リゾート施設内に製造工

場を作ろうとしたのですが、露見して教団を破門されました。シュラ・コンサルタンツもKAMZAとの関係を清算しました」

「でも、阿修羅教団ともあろうものが、至道とその一味を破門しただけで放置するなんて考えられないなあ」諒輔は首を傾げる。

「これは日野さんの個人的な推察ということですが、妹の穂来が至道を制裁すべしという教団内部の意見を抑え込んでいるようなのです。また、至道一味はその強力な呪殺のパワーを有していることに加え、大量のサリンを箱根から西神坐島に持ち込んでいる形跡があり、制裁するにしても、相当な覚悟が必要だとの思惑があるようなのです」

「至道というのは極め付きの危ない奴なんだね」

「ええ、警察と阿修羅教団の双方が至道一派の動きに警戒を強めています」

想像以上に危険な相手であることを知り、身が引き締まる思いであった。

「鮫島至道については、大体わかりました。次は道真神威教についてお願いします」

神崎は、別ファイルを取り出すと、その内容を見ながら語り出した。

道真神威教は蘆屋道満の系譜に連なる者達が、連綿と伝えて来た呪術を基盤に、オカルト的な要素を加味して至道の母、サイが開祖として立ち上げた宗教団体であった。その教義の要諦は、『自分に仇為す者がいなくなれば幸せになれる』というもので、信者になれば呪力により、自分にとって邪魔な者、嫌いな者を排除できるとしていた――

「随分、手前勝手な理屈だな。自分の努力は差し置いて、邪魔な人を除くことによって、自分の幸せを得る。それって乱暴すぎるよ、そんなやり方では入信者はいないのではないですか？」

「それがそうではないのです。多かれ少なかれ誰もが自分にとって、邪魔な奴、嫌な奴、がいるものです。そして、それらが居なくなることを、心の底で願っているのです。道真神威教はそんな人の心に忍び込むのです」

「夫の不倫に悩む妻なら、不倫の相手がいなくなればどんなに良いだろうと思うでしょうね」

「そうです、職場や政治の場では、競争相手が居なくなれば、出世が早まると考えるでしょう。子供だって、勉強のライバルやいじめっ子がいなくなればと思うのではないのでしょうか」

「それで、入信すれば、本当に呪祖で、邪魔な人や嫌な人を排除できるのかしら？」

「いえ、誰もがすぐに呪力を使いこなせるものではありません。そのような者に対しては教団が手助けをして排除するのです。サリンはその手段に使われるのではないかと、警察庁の日野さんは心配していました」

「なんだか中世イスラムにあったという暗殺教団みたいだな」

そう発言した諒輔であったが、サリンを使ってまで邪魔な人を抹殺しようと企むとは、歴史上悪名高い暗殺教団よりも更に凶悪で始末が悪いと思い直した。

「実際に教団の信者は拡大しているのですか？」理紗が心配そうな表情で聞く。

「ええ、昨今の競争社会、格差社会の到来により、民間会社のサラリーマン、OL、公務員、政

治家、専業主婦と広い分野で勢力を拡大中とのこと。特に最近、ニートなど社会から疎外された若者たちに急速に浸透しているようです。そのような情勢を受け、警察庁ではその拡大に神経を尖らせており、実態調査を強化しているそうです」

想像以上に容易ならざる敵であることを知り、二人はしばし押し黙ってしまったが理紗が何かに気付いたようで質問した。

「至道たちにとって、邪魔な人って誰かしら？」

「それは……」

理紗の言わんとするところを察して愕然とした。

「反対派の人達……ああ、こうしちゃいけない、早急に手立てを考えないと」

明日にも反対派の人達に集まって貰い、自衛策などを打ち合わせることにし、この日は神崎が持参したカムザリゾートの建築設計図など各種の資料について終日協議を続けた。

しかし、その翌日、諒輔たちの危惧が早くも現実のものとなってしまうのである。

第五章 呪殺鉄輪の法

その翌日、六月二十四日の未明、漁業組合長が自宅の寝室前の廊下で倒れているのが家人により発見された。まだ夜明け前であったから、正剛の自宅に家人が走り往診を依頼した。台風の影響で激しい雨の降る中、正剛が寝ぼけ眼をこすりながらハンドルを握り駆け付けた時は、すでに組合長は心肺停止の状態であった。

組合長はこの一週間ほど、身体の不調を訴えており、五日ほど前に診察したが、特に悪いところは見当たらなかった。ただ、悪夢に悩まされ眠れず食欲がないとのことだったので、睡眠薬を処方しておいたのであった。従って、正剛にとって組合長の突然の死は意外であった。死因について、これと言って特定できるものはなく、また他殺の痕跡も見当たらなかった。

漁業組合長の死は、重大ニュースとして、瞬く間に全島に伝わった。諒輔、理紗、神崎がこのニュースを知らされたのは、メイン棟のレストランで朝食をとっていたときである。三人の席に拓馬がやってきて、島の重大ニュースを伝えたのだ。

その話を聞いた三人がすぐに思ったのは、反対派の旗頭である漁業組合長が至道一味に殺害されたということであった。それは直感ではあるが、確信でもあった。至道一味の犯行を裏づけるものがないか調査しなければならない。諒輔たちは食事を早々に終えた。

諒輔は直ぐに診療所に行くことにした。正剛から組合長の死について、詳しい状況を聞くためである。理紗と神崎はその間に、真俊に事情を説明し、反対派の主要メンバーを集める作業と会合で配布する資料の作成にあたることにした。

診療所には、八時頃に着いた。風雨が収まってきたので自転車で行ったのだが、びしょ濡れである。診療所のドアの鍵はすでに開けられていて、人気のない待合室を抜けて診察室に入ると、正剛が診察用のベッドで眠っていた。未明からの往診で疲れたのであろう。起こすのは悪いとそっと診察室の外に出ようとしたが、人の気配を感じたのか正剛が眼を覚ました。

「おや、諒輔じゃないか、こんな朝早くどうした？」

「起こしてしまって御免、実は組合長が亡くなったと聞いたものだから、事情を聞きたくて」

「おおそうか」

正剛はベッドから起き上がると大きく伸びをし「何が聞きたい？」と言いながら自分の椅子に座った。

諒輔が昨日、神崎から得た至道一味の情報を掻い摘んで伝えた上で、組合長の死に不審な点が無かったか質した。ただ、呪祖のことやサリンのことは伏せておいた。

「ふーん、奴らはそんなに危険な連中だったのか……実は組合長の突然死については俺も納得が行かなくてな」

「どういう点が納得行かないの？」

「死因が分からんということだよ……死亡診断書の死因は不詳とする積りだ。自宅での突然死だから、警察にも届け出ようと思っている」

「すると他殺の可能性があるということ？」

「うむ、だが外傷はないし、薬物を盛られた形跡もない」

「それじゃ、サリンなどの毒ガスで殺された可能性は？」

「何だ、彼等はサリンを所有しているとでも言うのか？」

「いや、そう言うわけじゃないけど、ちょっと気になったものだから」

「ふーん、まあいいか……サリンなどの神経ガスにやられた場合の特徴はな、瞳が異常に縮む、縮瞳と言う症状が起こるんだ。しかしそんな症状は無かったな。それにもしサリンが使用されたとしたら、多数の人が死んだはずだ」

「うーん、すると矢張り、呪祖で殺されたか……」

諒輔は考え込み、独り言のように呟いた。

「呪祖だって？　そう言えばユタの咲江おばあも、漁業組合長は崇られているとか言ってたぞ」
看護師と結衣が出勤してきたようで、二人の朝のお喋りが聞こえる。

「おーい！　結衣ちゃん、諒輔に話をしてやってくれないか」

結衣は最初何事かと緊張した面持ちであったが、あばあのことと知ると表情を和らげ、諒輔の質問に答えてくれた。

結衣の話によると、咲江が漁業組合長に呼ばれて、自宅に行ったのは正剛の結婚式の翌日の二十一日のことであった。咲江は組合長に、どこが悪いのか聞いたところ、連夜恐ろしい夢をみて眠れない、食事も喉に通らないと組合長は訴えたいらしい。そこで咲江は祈祷をし、一心に祈ると神が憑依してお告げを述べた。そのお告げとは『恐ろしく強い力を持つ、邪悪な何か、組合長に取り憑いている』というものであった。組合長とその家族は咲江に、その邪悪なものを取り祓ってくれるよう嘆願したが、咲江は自分一人の力量ではとても敵わぬ相手だと告げ、他の島のユタに協力を求める必要があるとして、その場でのお祓いをせずに帰って来たとのことであった。

諒輔は、咲江から直接話を聞きたいと思い、結衣に住所を聞き訪ねることにした。台風は遠ざかり、早くも真夏の太陽が雲間から顔を出している。今日は蒸し暑い一日になりそうだ。そんな日差しの中を自転車に乗り訪ねた先は、村営住宅の中の一棟であった。ユタということで、赤瓦の古い民家に住んでいると勝手に想像していたが、咲江は村営住宅に住んでいたのだ。部屋に上がると早速、質問を開始した。

「その邪悪なものは、姿や形がありましたか？」

「最初や黒々としたもぬが蠢くばかりやったが、次第に姿(すがい)が現れてきたさあ」

「どんな姿をしていたのですか？」

「それがな、なま思い出しても恐ろしい姿でな、頭(ちぶる)に冠んようなもぬを被り、身体中細い蛇のようなもぬを何本も生やしておった。そして冠んかいや三本ぬ火が灯っておって、うぬ明りんかいゆらゆらする形相やまさんかい鬼であった」

「三本の火だって？」

「ああ、揺れていたから、あれや蠟燭ぬ明かりやさや」

これは呪殺鉄輪の法そのものではないか。

「それで取り憑いたものの正体は分かりましたか？」

「長いこと、海蛇(いらぶー)やら海豚(ひいとう)やらぬ殺生をしてきたちゅあんくとう、定めしそ

れらん崇りと思うていたぬだが、あれや人(ちゅ)ぬ姿をしておった。女(いいなぐ)やさあ」

「組合長に取り憑いたものは、恐ろしく強い力を持っていたそうですね？」

「わんも長い間ユタをしてきたが、あんなにかい凄い力を持つ憑きもんかいや初めて出会った。わん一人ではいっぺい敵わねえ。ユタが10人集まっても勝つぬや難しいやんやー」

“呪殺鉄輪の法”であれば、その呪祖力はさぞ強大であろう。咲江の話聞き、組合長が至道の呪祖により殺害されたという確信を更に深めた。



諒輔は“ヴィラ星の砂”に戻った。ちょうど昼時だったので、理紗と神崎に報告がてら一緒に昼食をとることにした。

理紗と神崎に、組合長が“呪殺鉄輪の法”で殺された確率が高いことを伝えると、理紗は気味悪げに顔を顰めた。神崎は表情を変えずに、昼食を食べ続けていたが、諒輔の報告が一段落すると、食事の手を止め、反対派の集会について諒輔に説明した。

「金城社長に反対派が危険な状況にあることを説明しました。サリンや呪祖のことはもちろん伏せております。金城社長は我々の話を聞いて、驚いておりましたが、『緊急事態だ』と言って、反対派の主要メンバーを今夜参集する手配をしてくれました。それから、島の治安にも係ることなので、駐在にも出席するよう声をかけるとのことでした」

「その駐在さんだけど、どうにも一人じゃ頼りないなあ。日野さんに頼んで、もう何人か警察官をこの島に常駐させることは出来ないものかな」

諒輔は昨日会った駐在の顔を思い出して言った。

「そうね、諒輔の話だとその駐在さん、人は良いけど、頼りにはなりそうにないものね」

理紗も同様のことを心配したらしい。

「分かりました、葛城さんを通じて頼んでみます。あ、それから用件を済ませたら、島を一回りしてきます。島の様子が全く分からんものですから」

神崎は、急いで食事を終わると、葛城に連絡するため自分のコテージに戻って行った。諒輔と理紗は夜の集会まで時間があつたので、ポルトガル村に行くことにした。カムザ関係者の宿泊施設になっているという旧ホテルも実際に確かめてみる積りであった。

第六章 ポルトガル村

拓馬から借りた車でポルトガル村に向かった。その途中、村を俯瞰できる高台に車を止めた。午後の日差しは強く、理紗は大きな帽子を被り、サングラスをしている。諒輔は神崎から借りてきた双眼鏡でポルトガル村を観察した。敷地の一番奥はコバルトブルーのサンゴ礁で、手前の平地部分に幾つかの建物が建っている。海岸に最も近いところに建つマンション風の建物は宿泊棟、中央の小高い所に建つ城のような建物がメイン棟、その横の南欧風のオレンジ色の瓦屋根の建物はレストランに違いない。その他は売店などの小さな建物があるだけのようだ。予想していた通りこじんまりした施設であった。

車に乗り込むと諒輔は、運転しながら理紗に、島人から仕入れたポルトガル村に関するあれこれを話して聞かせた。

ポルトガル村は、一九九〇年、ふるさと創生事業として国から交付された一億円を基に、現村長の安田が率先して開発したテーマパーク型のレジャー施設である。しかしご多分に漏れず、杜撰な計画により、開園以来赤字を計上し続けていた。中でもホテルは稼働率が極めて低く、赤字の元凶と目されていた。しかしそのホテルをKAMZAが買い取ってくれたので、何とか閉園せずにこうして持ちこたえている。安田村長は当初、西神坐島のリゾート開発には反対の姿勢であったが、KAMZAからポルトガル村のホテルを好条件で買い取るとの申し出を受けると、手の平を返すように、リゾート賛成派に転じた――

そんな話をする内に、ポルトガル村に着いた。駐車場に車を置いて入り口から中に入る。入園者は、ちらほら程度にはいて、まったくの閑古鳥状態ではない。に入った所に案内板があり、入場料、開園時間、入園規則などが記載されている。どうやら入場料は無料らしい。

まずはメイン棟に行こうと案内矢印に沿って歩みを進めた。道は椰子の並木になっており、両側には熱帯植物園風の庭園が広がっている。赤い花をつけた背の高い木があちこちに見受けられる。初夏に花が咲くデイゴであろう。ブラシの木もユニークな形状の花を咲かせており、その周りを蝶が蜜を求めて舞っていた。

メイン棟に到着した。中世ヨーロッパの城を模した外観で、入り口と屋上に緑と赤の二色旗が掲げられている。多分ポルトガルの国旗であろう。ここに入るには大人三百円の入場料がかかるようだ。入場料を払い内部に入る。正面壁面にポルトガル村の名前の由来などが書かれたプレートが掲げられている。

《ポルトガル村は、琉球王朝時代に神坐村の住民がポルトガルの難破船を救助したゆかりの地に建つテーマパークです。ポルトガルと我が国の交流の歴史を学びながら東神坐島の美しい自然をお楽しみいただけます。この建物はポルトガルのリスボン郊外に建つサン・ジョルジェ城をモデルにして建設された資料館です。また、隣にはポルトガル料理をメインにしたレストランがございますので、どうぞご利用下さい》



資料館ということで内部の展示場には、「八重山諸島の歴史」「鉄砲伝来」「南蛮貿易」「ポルトガルの文化と観光」などのコーナーがあって諒輔は興味深く見て回った。しかし、開設以来、展示内容はそのままでのようで、薄汚れ、一部は破損しており、みすぼらしい感じを拭えなかった。また、ポルトガルの難破船を救助したというのは、伝承の域を出ないもののようで、この地にテーマパークを作る理由としては説得力に欠けていた。

メイン棟を出ると次に宿泊棟に向かった。諒輔はレストランで軽く食事をしたのだが、理紗に嗜められて渋々海岸に向け坂を下って行った。

以前ホテルであった3階建ての建物は、客室から海が見えるようにとの配慮であろう、海岸に近いところに建っている。敷地の周りは低い塀が廻らされており、ゲートは閉鎖されていた。そのゲートには大きな看板が貼り付けられている。

《関係者以外の立入りを固く禁ずる (株)KAMZA》

中の様子を窺うが人の気配が感じられない。

「どうしよう、中に入ってみようか？」

「建造物不法侵入だけど、この際どうでもいいわよね、入りましょう」

塀をぐるりと回り、人目の付き難い個所から、塀を乗り越えることにした。低い塀ではあったが、理紗は大きな帽子と、裾まであるリゾート風のスカートが邪魔のようである。諒輔は理紗を、お姫様抱っこして塀の向こうに降ろしてあげた。続いて諒輔が軽々と塀を乗り越えると、建物の裏側の業務用入口に近寄った。中の気配を窺っていた理紗が不審そうな表情で諒輔を見やっ

った。

「やはり人の気配がしないわ、みんな何処に行っちゃったのかしら？」

「西神坐島に従業員宿舎が完成して、そちらに移ったのかもしれないね」

神崎が持ってきた資料にリゾートの詳細な計画書があり、それに従業員宿舎の建設についての記載があったのだ。

「建物の中に入ろうと思うけど、理紗はここで待っていてくれないかな」

「ええ！ 一人でここに？」不安そうな表情をして、首を振る。

「一人じゃないよ、犬麻呂と一緒にだ」

「そう、それならいいけど」まだ、納得行きかねる様子だ。

「万一、誰かやってくるかもしれないだろう、そんな時は携帯で連絡して欲しいんだ」

理紗は、そういう役割があるのならと、やっと納得して頷いた。

諒輔が呪文を唱え、犬麻呂と牛麻呂を召喚した。犬麻呂には理紗を守るように、牛麻呂にはついて来るよう命じた。犬麻呂は嬉しそうに理紗のもとに行くと、人目につかないガジュマルの木の根元に理紗を案内している。

諒輔はドアの取手を引いてみた。当然ながら鍵が掛っている。鍵穴を覗き込んで調べてみると

、このドアの鍵はどこにでもあるような普通のもので、これなら中から容易に開けることが出来そうであった。式神はほんのわずかでも隙間さえあれば、中に入ることが出来る。牛麻呂に中に入って鍵を開ける様に命じた。牛麻呂は身体を紙のように平べったくして、ドアの隙間からスリと中に入り込んだ。すぐにガチャリという音がしてドアが中から開け放たれた。

諒輔は建物内に入ると鍵を閉め、薄暗い室内を見渡した。右側は厨房のようで、大小様々な鍋やフライパンが吊り下げられ、ステンレス製の大きな調理台や、各種の調理器具が所狭しと、置かれていた。左側は食材倉庫のようであったが、生鮮食料は見当たらず、缶詰、瓶詰の類が棚に置かれていた。更に進むとドアがあり、開けて外を覗くと、通路になっている。通路の向かい側にもドアがあり、“Staff Only”と書かれている。右手の方が明るいので、フロントがあると見当をつけ歩いて行くと、果たしてそこに、フロントとロビーがあった。吹き抜けの天井に明り取りの窓が設けてあって、この空間は十分に明るい。

二階に通じる階段がある。ロビーの案内表示によると、二階は宴会場と一部が客室になっているらしい。階段を上るとそこも狭いながらロビーのようになっている、その先が宴会場の入り口のようにであった。

ドアを開けて宴会場に入った。中は窓にカーテンが引かれており、薄暗くて最初は中の様子がよく見えなかったが、目が慣れると、左手奥が舞台になっていることが分かった。ホテルであった頃は、この舞台で結婚披露宴の余興が繰り広げられたことであろう。

ふと気がつくと、牛麻呂がいない。どこに行ったかと辺りを見回すが宴会場にはいないようだ。宴会場のロビーに戻ると、そこに牛麻呂がしょんぼりと佇んでいる。「何で中に入らないのか」と訊くと、「魔除けの霊符が宴会場の中に貼られているから入れない」と言う。そんなものがあつたかと、思いつつも一度宴会場の中に入って良く検分してみた。魔除けの正体が分かった。舞台の奥に“ドーマン”の印が描かれた大きな垂れ幕が吊り下げられていたのである。また、ドアや窓の上にも同様の印が描かれている。成るほどこれでは、牛麻呂は中に入れまいであろう。

“ドーマン”とは、縦四本、横五本の格子状の印で、九字紋とも呼ばれる。古来、魔除けの印として用いられてきた。もう一つ、魔除けの印で有名なのが“セーマン”で、こちらは星状の印で、晴明紋とも呼ばれる。これらの名称からも分かるように、この二つの魔除けの印は陰陽道に関わるものであり、“ドーマン”は蘆屋道満、“セーマン”は安倍晴明の名に由来している。“ドーマン”は道真神威教のシンボルマークとして用いられ、この宴会場は道真神威教の祈りの場もしくは道場のようにして使われていたことであろう。

あまり牛麻呂を待たせては可哀想と、宴会場の外に出た時、マナーモードにしておいた携帯がブルブルと震えた。

「もしもし諒輔、聞こえる？」押し殺した様な理紗の声である。

「ああ、聞こえるよ」

「誰かやってきたの、ゲートの前に車が止まって人が降りたわ」

「そうか、相手に気付かれないように説明を続けてくれ」

「ええ分かったわ……一人だけのようだよ、ああ、あれは女ね、手に持っているのはモップとバ

ケツかしら」

「モップとバケツ？」

「そうよ、モップとバケツ、あれは掃除のおばちゃんだわ、あっ、こっちに向かってくる、裏口から中に入るのよ、きっと」

「そうか分かった、もう電話切っていいよ、話声が聞こえるとまずいから」

「じゃ、切るわね、また何かあったら知らせるわ」

携帯を切ると諒輔は階段を下りて、フロントのカウンターの裏に身を潜めた。牛麻呂も諒輔の後ろで身体を屈めている。普通の人には式神の姿は見えないのだから、堂々としていてもいいのにと内心可笑しく思っていると、厨房に続くドアが開いて、こちらに歩いて来る気配がした。やって来た人は成るほど、モップとバケツを手にしている。中年の女性で、眼鏡を掛け、業務用のエプロン、頭には三角巾を着けている。掃除のおばちゃんという理紗の形容通りであった。

女はロビーの掃除を始めたが、そのやり方は実に雑で、一通り床をモップで濡らすと、もうそれで掃除は終わりのようであった。モップを壁に立てかけると、やれやれというように背伸びして、腰を叩いた。もうこれで帰るのかと、諒輔はあきれの思いであったが、早く帰ってもらった方がいいので、これ幸いと思うことにした。

女はモップとバケツを手にすると、厨房入口のある方に戻って行った。諒輔はフロントのカウンターからそっと出て、物陰から女の帰る様子を見守った。女は意外にも厨房のドアには入らず、向かい側の“Staff Only”の表示のあるドアを開けると、モップとバケツをそこに置いて、中に入ってしまった。あのドアの向こうには何があるのだろうと興味を掻き立てられ、足音を忍ばせてドアに近付いた。ドアは開けられたままで、中を覗くと階段が下に続いている。どうやら地下に通じる階段のようである。階段を少し降りて下の様子を窺う。照明が点いており、女の行動が見て取れる。

階段を下りて直ぐの所は、更衣ロッカーが並んでおり、女はロッカーの扉を、一つ一つ開けて中を覗き込んでいる。何か探し物をしているようだ。誰かに忘れ物を探すよう頼まれたのだろうか。全てのロッカーを調べても何も見つからなかったようで、女は更に地下室の奥に進んで行く。諒輔は階段を降りて、女の後を追った。

地下室は思いのほか広くて、洗濯機が何台も置かれていたり、ボイラー設備などの機械が設置されたりしていた。女はそういったものには眼もくれず、一番奥まった所に至ると立ち止った。諒輔も音を立てないように気をつけて近寄り、物陰に身を潜めた。牛麻呂も同じように身を屈める。

女が眺めているのは、コンクリートの壁に嵌め込まれた重量感のある金属製の扉であった。扉の取手を両手で握り、力を込めて引いていたが扉は微動もしない。女はあきらめたらしく、踵を返してもと来た方に歩み出した。諒輔は頭を下げて、女をやり過ごす。

階段を上がる足音がして、地下室が闇に包まれた。女が照明を切ったのだろう。続いてドアが閉まる音が聞こえた。諒輔は真っ暗闇の中、物陰から這い出ると、牛麻呂に階段を上がって、照明のスイッチを入れるよう命じた。暗闇は式神にとってお手の物のようで、すぐに照明が入った

。一番奥に行き、扉を観察した。それは銀行などの金庫室の扉と同じ造りであり、KAMZAがこの建物を購入してから設置したものであろう。中を見たいと思うが、ダイヤル式の鍵まで付いた本格的な装備であり、とても開けられるようなものではなかった。また、その扉は密閉式になっているようで、式神が入り込む余地もなかった。

階段を上がり通路に出ると、携帯がブルブルと震えた。

「諒輔ったら、中々電話に出ないでどうしたのよ、心配したじゃないの」

拗ねたように理紗が言う。長い間待たされて、ご機嫌斜めのようなのだ。

「いやあすまん、地下室にいたものだから、繋がらなかったんだ」

「それならいいんだけど....掃除のおばちゃん帰って行ったわよ」

「分かった、僕も直ぐにここを出る」

諒輔は三階をまだ調べていないのが心残りではあったが、あまり理紗を待たせる訳には行かない。探索を切り上げて外に出ると、理紗と犬麻呂が駆け寄ってきた。

その夜、反対派の集会在“ヴィラ星の砂”で開かれた。緊急であったので参加出来ない者もいたが、それでも十数名が集まった。諒輔、理紗、神崎それに正剛にも参加して貰っている。駐在は時間に少し遅れたがやって来て集会に加わった。

冒頭に真俊が神崎を紹介した。諒輔と同じ財団の職員で、元自衛官であり、警察庁に情報ルートを持っている人物との触れ込みである。神崎はKAMZAの社長である鮫島至道と、道真神威教の話の皆に聞かせた。過度の心配をかけさせないように、サリンと呪殺については省いている。それでも、襲撃された経験がある反対派の人達は心配そうな表情で神崎の話を聞いていた。

神崎の説明が終わると、活発な議論が交わされ、色々な対策が提起された。また駐在の対応が生ぬるいとして、吊るし上げのような事態になるなど議論は白熱した。真俊が駐在を責めるのは酷だとして、激高する人々を宥める一幕もあった。しかし意見は中々纏まらない。それでもなんとか自警団の結成と、警察官の増派を八重山署に正式に申し入れること、それから身の廻りに何か異常なことが起きたら、互いに連絡し合うことが確認・合意され、その日の集会はお開きとなった。

第七章 悪霊祓い

翌、六月二十五日、諒輔と理紗が朝食をとっているテーブルに真俊がやってきた。相談したいことがあるので、食後、事務所に寄ってくれとの申し出である。真俊は眼の下に隈を作り、憔悴した表情であるのが気がかりであった。諒輔が相談に乗ることにして理紗を自室に帰し、一人で事務所に出向いた。

事務所の中の奥まった所に社長室があり、出迎えた真俊は諒輔をその中に招じ入れた。狭いスペースに小振りな応接セットが置かれている。諒輔は勧められるまま椅子に腰かけ真俊に向き合った。

「先ほどはお寛ぎのところ、食事の席に押し掛けて失礼しました」

「いえ、構いません。それより顔色が悪いようですが何かありましたか」

「ええ、私にとっては異常な出来事が……でも他人からみると大したことじゃないと言われそうで……」不安と戸惑いをない交ぜにした表情である。

「どんなことです？ 言ってみてください。昨夜の集会で、何か異常があればどんなことでも連絡し合う約束をしたでしょう」

「そうですね、分かりました……実は恐ろしい夢を見たのです。いやあれは夢ではなく現実のものだったのかもしれない」

諒輔は真俊の眼を見つめ、勇気づける様に頷いて見せ先を促した。

「深夜、気がつくとなれが部屋にいたんです。私は金縛りにあったように、身動きどころか、声を上げることさえ出来ませんでした」

その後、真俊が話した内容は、神懸かりした咲江が見たものとほぼ同様であり、真俊の部屋にいたものは、至道の呪祖による鬼女に違いなかった。

「漁業組合長も同じような悪夢に悩まされていたことをご存知ですか？」

「ええ、何かの祟りであったと噂で聞いていました。だから余計に不安なんです。私も、漁業組合長と同じように死ぬのかと……」

不安に怯える真俊に、何と告げるべきか一瞬迷ったが、危険な状況であることは伝えておくべきだ。

「強力な何かに取り憑かれています。容易ならざる事態です」

真俊は何か言おうとしたが、声にならずただ大きく頷くばかりであった。

「しかし、我々はあなたを助ける手立てを知っています」

「本当に助ける手段を知っているのですか？」

藁にも縊るといような表情で真俊は訊ねる。

“私は陰の長者です”と言っても、真俊には何が何だか分からないだろう。ここは嘘も方便で理紗に登場願うことにした。

「実は、安倍理紗は安倍晴明の直系の子孫なんです。彼女は陰陽道に通じており、悪霊祓いの方法を知っています」

真俊は安倍晴明の名を聞くと納得したようで、しきりに頷いている。安倍晴明公の威力は絶大

だと改めて感じた。

「ただ、助けるにはユタの咲江さんの協力も必要です。金城社長から事情を説明して、今夜社長の自宅に来るよう言ってくれませんか」

諒輔一人でも悪霊祓いは出来るのだが、真俊や家族の者を安心させるためにはユタの力も借りた方が良く判断したのだ。

「分かりました、諒輔さんと理紗さんも来てくれるんですね」

「もちろん行きます。我々が必ず撃退してみせますから、心配しないで普通に仕事をしていて下さい」諒輔は力強く励ました。

さてその夜、十時、理紗を伴って真俊の自宅を訪れた。理紗は最初、気味悪がって同行を拒んだが、理由を説明してなんとか一緒に来て貰っている。今夜の理紗は裾まである黒のサマードレスに黒のショールを肩にかけ、サングラスをしている。いかにも胡散臭いが、見方によっては霊能者らしい雰囲気がないでもない。

真俊の自宅は、鉄筋コンクリート造りの大きな二階建の建物であった。玄関を開けると真俊と拓馬の父子が出迎えた。そして咲江がすでに到着していて、別室でユタの装束に着替えていることを告げた。応接室に入ると、真俊の妻や両親がいて挨拶を交わした。そうこうする内、着替えを終えた咲江が応接室に現れたので、早速段取りを打ち合わせすることにした。



咲江に漁業組合長と同じ悪霊が真俊に取り憑いていることを説明すると、一人ではとても太刀打ちできないと咲江は主張した。そこで諒輔は咲江を納得させるための小芝居を打つことにした。真俊とその家族の信頼も得て置く必要がある。

諒輔は、皆に気付かれないように小さく呪いを唱え、犬麻呂と牛麻呂を呼び出した。

「皆さん、良くお聞きください。ここにいる安倍理紗さんは陰陽師として有名な安倍晴明公の直系の子孫です。晴明公から代々受け継がれた強力な呪力の持ち主です。では理紗さん、その呪術の力を少しばかり、皆さんに示していただけますか」

理紗とは打合せ済みのシナリオである。理紗は小さく咳払いすると勿体ぶった仕草で、ハンドバックからハンケチを取り出した。

「それではほんの少しだけですよ……ありゃあ！」

理紗がいきなり大声を上げたものだから、一同驚き、のけぞる。諒輔と犬麻呂、牛麻呂もびっくりだ。理紗は手にしていたハンケチをふわりと投げ上げた。すかさず犬麻呂と牛麻呂は腰に差した扇子を開くと、ハンケチを煽いだ。するとハンケチの周囲に五色の霞がかかり、その霞が薄らぐと羽衣を肩にかけた小さな天女が空中に舞い出た。しばらく優雅に舞っていた

が「はあー！」とまた理紗が大声を発すると、犬麻呂と牛麻呂は煽ぐのを止めた。天女はたちまち元のハンケチに戻り、ふわりとテーブルに落下した。

「よく分かりました、理紗さんの力、しかと拝見しました」

真俊が感嘆した表情で言うと、居合わせた人は皆、頷いて納得した。咲江も頷いていたが「何かそこんかい居るようだが、あれーうんじゅぬ遣い神か？」と理紗に訊ねた。

「ほおーほっほっほっ、さすがユタ殿、その通りでございます。可愛いらしき者どもでございましょう？」

理紗に可愛いと言われて、犬麻呂と牛麻呂は嬉しそうにモジモジしている。それにしても理紗はやり過ぎである。ボロが出ないうちに幕引きにしなければならない。呪を唱えて犬麻呂、牛麻呂を引き下がらせると、諒輔は大きく咳払いし「さあこれで皆さんもご納得していただけたようなので、悪霊退散のための準備にかかります。それでは真俊さんの寝室に参りましょう」と言って立ち上がった。

真俊の寝室は二階にあった。夫婦の寝室は別々のようで、真俊の寝室は、襖を仕切にした和室二間が当てられていた。片方の部屋にユタの祭壇を作ることにし、真俊が寝る部屋には、いつものように布団を敷かせた。用意してきた紙製の等身大の形代を敷き布団に置くと、諒輔の準備はこれで終わりである。咲江の祭壇作りを理紗と一緒に手伝い完成すると、諒輔、理紗、咲江は応接間に戻った。真俊は十二時になったら寝室に行く手筈になっており、それまでは拓馬と居間で酒を飲んで過ごしている筈である。諒輔達もその時間に寝室に行くことにしていた。応接室には、泡盛、ウィスキーなどと酒のつまみが出されていたので、ちびちびやりながら時間の過ぎるのを待つことにした。

十二時少し前、真俊が応接間にやってきた。さすがに緊張した面持ちである。諒輔は心配しないよう励ましつつ、先頭に立ち二階に上がった。咲江と理紗は祭壇のある部屋で祈祷をすることになっている。理紗はもちろん祈祷の真似ごとをするだけだ。諒輔は真俊、咲江の二人に霊符を渡し、肌身離さず身につけて置くよう念を押した。霊符を渡された咲江は「おう、くれーぬセーマンの印！」と有り難そうに押し頂いた。理紗には既に渡してあり、肌に着けている筈であった。

「霊符を身につけておけば、悪霊はそこに人が居ると気付かないから安心して下さい」

諒輔はそう言うと、真俊と共に布団の敷かれた部屋に入り仕切の襖を閉めた。

部屋に入ると、理紗のアシスタントとして悪霊祓いの準備を行うと真俊に告げ、形代の上にと寝そべるよう指示をした。真俊が言われたようにするのを見届けると、照明を切り、部屋の片隅に座って悪霊祓いの準備にとりかかった。

悪霊退散の法は、裏土御門家のいわばお家芸とも呼べるもので、古来、公家、殿上人、有徳人などから要請を受けて、施してきたものである。従って並みの悪霊であれば、裏土御門に連なる者なら誰でも祓うことが出来たのである。しかし、今夜の相手は、最強の呪祖「鉄輪の法」によるもので、これに対抗できるのは陰の長者しかいない。諒輔は気を引き締めて祈祷に集中し、形

代に真俊の気を写し取った。

「そっと起き上って下さい。形代は破れやすいので気を付けて……起きたら隣の部屋で待機して
いて下さい」

真俊は上体を起こすと、こうようにして隣の部屋に行った。襖がぴったり閉められたのを見届
けると、諒輔は気を鎮め気配を消した。後は鬼女の現れるのを待つばかりである。

午前一時を過ぎても生霊は現れない。更に一時間が経過して、床の間に置かれたアンティーク
な時計が、チンチンと小さな時を告げた。ややあって迫る者の幽かな息遣いが聞こえた。

(いよいよ鬼女が現れるぞ)

胸の内で自分に言い聞かせたその時、空気がざわめくような気配があり、暗がり凝縮されて
、室内は真の闇に包まれて行った。

「来るぞ！」諒輔は隣の部屋に向け低く叫ぶと、部屋の片隅の闇を凝視した。

先ず現れたのは、赤い点であつた。それは闇に光る獣の眼のようであつたが、次第に大き
くなり、ちろちろと揺れる三つの炎になった。三つの炎は、鉄輪の脚の蠟燭の灯であり、その炎に
照らされて、人らしき影が滲み出て来た。最初はぼやけていたが次第に輪郭を形作り、赤衣着物
を身に着けた女の姿が浮かび上がった。その姿は若い女のようなのであるが、蠟燭の灯で揺らめく女
の形相は鬼女そのものであつた。

それはしばらく身動きをせず、影が形になるのを待つ様であつたが、形が整うと“ぐらり”と動
いて、真俊の形代に向け歩み出た。手に何かを携えている。右手に槌、左手には五寸釘、丑の刻
参りと同じ道具だ。

「恨めしや御身と契しその時は、玉椿の八千代、二葉の松の末かけて、変わらじとこそ思いしに
、などしも捨ては果て給ふらん、あーら恨めしや」

鬼女は陰に籠った声音で呟くと、一転して、獣のような敏捷な動きで形代に飛びかかり馬乗り
になった。形代の首に五寸釘を左手で当てると、槌を持つ右手を大きく振り上げ「いで命をと
らん」と叫び、槌を振り下ろした。

「うぐっ！」苦痛の呻き声を上げたのは鬼女であつた。

周囲を訝しげに見渡していたが、また右手を振り上げ、勢いよく振り下ろした。

「ぎゃあ！」

鬼女は槌と五寸釘を投げ捨てると、自分の喉を両手で押さえて身悶えた。緑の黒髪は白髪に代
わり、すらりと伸びた腰は押し曲がり、着物の袖から伸びた白く艶やかな両腕は皺だらけのもの
に変じて行った。それは瘦せさらばえた老婆の姿であつた。奇妙なのは口が烏天狗のように尖っ
ていることであつた。

諒輔は“頃は良し”と見定めると、止めの呪を唱えた。老婆は白眼を剥いて痙攣して輪郭を崩し
て行った。そして次第に影が薄くなり消え去った。

布団の上に残された形代には大きな黒い染みが付いていたが、諒輔は取り上げると、折り畳
んで、無造作にズボンのポケットにねじ込んだ。

「終わりました。もう大丈夫です」

諒輔が隣の部屋に声を掛けた。恐る恐る襖を開けて三人が部屋に入って来た。

「咲江さんと理紗さんの祈祷により、無事に悪霊を祓いました」

自信に満ちた諒輔の言葉に真俊は一先ず安心した様であった。それでも、まだ不安は拭い去れないようで「何やら恐ろしげな声が聞こえましたが、あれは悪霊のものですか？」と訊ねた。

「さて、アシスタントの私には、良く分かりかねるので、理紗さんにお答えいただくとしましょう」

いきなり振られて、理紗は一瞬戸惑った様子を見せたが「いかにも悪霊の声です。あの断末魔の声お聞きになられたでしょう。悪霊は懲らしめられ、祓われました。二度と現れることは無いでしょう」と厳かに告げた。役者ぶりが板についてきたようだ。

「そうじゃ、悪霊やもう現れねーん」

咲江もそう断言すると、真俊はようやく得心したようで、肩の力を抜き皆に向かい頭を下げた。

「ありがとうございます、お陰で助かりました。本当にありがとうございました」

心底、恐ろしかったのであろう、その恐怖から解放されて、語尾が涙声になっていた。

「あれは漁業組合長を襲った悪霊と同(むに一)もぬであったな、それんかいしても恐ろしき相手じゃった」

咲江の述懐に一同頷き、しばらく無言であったが、諒輔が沈黙を破った。

「さあ、夜明けまでまだ時間があります。一眠りしましょう」

「いや、興奮して眠ることは出来そうにもありません。よろしかったら下で飲み明かしませんか？」

疲れたし、眠くもあったので、どうしようかと思案している内に理紗が発言した。

「私も、今さら眠れないわ、ご家族の方も心配しているでしょうから、無事に済んだことを伝えてあげたらどうかしら」

何時もながらに、まっとうな理紗の申出に、逆らうべくもなく、諒輔は承知したのであった。

階下に行き、寝ないで起きていた家族の者に無事に悪霊祓いが出来たことを伝えると、皆、大層喜んで、家族も交えた酒盛りになってしまった。明け方になると諒輔も理紗も酒の酔いと疲れのために泥のように眠ってしまい“ヴィラ星の砂”の自分たちの部屋に戻ったのは六月二十六日の正午を過ぎていた。二日酔いで気持ちが悪かったが、部屋でシャワーを浴び、着替えをすると、少しばかり食欲が出て来た。理紗も少なから食べられそうというので、メイン棟のレストランに行くことにした。

サンドイッチにジュースという軽い食事をとっていると、拓馬がやってきて、昨夜の礼を述べ、悪霊払が成功したことが噂として既に島中に広がっていることを告げた。また神崎が今朝早く、カムザリゾートを調査すると言って、西神坐島に出かけたことも伝えた。

「それにしても、理紗さんがそんなに凄い霊力の持ち主だなんて知りませんでした」と理紗に向かい“恐れ入りました”と言うように頭を下げるとフロントに戻って行った。

第八章 往診

六月二十七日、二日酔いもすっかり抜けて、爽やかな朝を迎えることが出来た。朝食を済ませ部屋に戻り寛いでいると、ノックする音が聞こえた。ドアを開けると、不安そうな表情をした結衣がいて、その後ろに富紀が立っている。

「あれ結衣ちゃん、富紀さんも一緒にどうしたの？」

二人が揃ってやってくるとは何事だろうと訝しく思いながら、二人を室内に招き入れた。

「何か起こったのですか？」

諒輔は二人に椅子を勧め、自分も向かいの席に座った。

「実は、昨夜、正剛さんが戻らなかったのです」

富紀は一晩中眠れなかったのだろう、憔悴した様子である。

「えっ！ 結婚早々に無断外泊したんですか？」

冷蔵庫から飲み物を持ってきた理紗が驚いて口を挟んだ。

「いえ、結衣さんから戻らないことは連絡していただきました」

「どういうこと、結衣ちゃん話してくれるかな？」

諒輔から説明を求められて結衣は困惑した表情で話し出した。

「昨日の朝、診療所が開くと同時に、男の人が来たんです……急患が出たので、直ぐに往診して欲しいと言って、車に先生を乗せて連れていったんです」

「何処にいったか分かっているのかい？」

「カムザリゾートに行くと言った先生はおっしゃいました」

「カムザリゾートに？」

飲み物をグラスに注いでいた理紗も驚いて手を止めた。

「ええ、西神坐島に行くから、帰りは午後三時頃になるだろうと言って出かけられたのです」

「だけど、帰らなかったんだね」

「そうなんです。先生の携帯に電話したのだけど繋がらないので、カムザリゾートに電話しました」

「うん、それで」

「社長室長と名乗る人が電話に出て、『先生は確かに往診に来ていただいています。ただ治療が今日中に済まないで明日まで、こちらに留まっていただくことになっています』って……」

その時のやりとりを思い出し感情が昂ったのだろう、結衣は今にも泣き出しそうである。対応した社長室長の態度がよほど悪かったに違いない。富紀が宥める様に結衣の肩を抱いていたが、結衣はようやく感情が治まったようで話を再開した。

「その社長室長が言うんです『先生が明日までこちらに居ていただくことは、村長も了承しています。不審なら村役場に問い合わせ下さい』って……それで村役場に確認したら、確かに村長の許可が出ているようなのです」

富紀は結衣の話に一々頷いていたが、結衣の話を引き取った。

「それで、結衣さんが私に連絡してくれたのです。でも正剛さんから、一言も連絡ないなんて心

配で……昨夜は一睡も出来ませんでした。それで今朝、こうして結衣さんと一緒にやってきたというわけなんです」

富紀と結衣が心配するのは無理もない。KAMZAの社長と道真神威教がどんなに恐ろしいか二人とも知っているからである。カムザリゾートが正剛に往診を頼んだ理由は分からないが、彼等が約束通り今日中に正剛を戻すかどうか疑わしい。富紀も結衣も、正剛が戻されないことに恐れを抱いて相談に来たに違いない。

「分かりました、私も父のことが心配です。カムザリゾートに直接行って事情を確認してきましょう」

富紀と結衣は諒輔の言葉を聞くと、口々に礼を述べ「どうぞよろしく申し上げます」と何度も繰り返して帰って行った。

この数日、神崎は西神坐島の調査に余念がないようであったから、ここは是非とも神崎の協力が必要である。神崎に電話すると幸い部屋にいた。神崎に事情を伝え、カムザリゾートの資料を持って部屋に来て欲しいと告げると、数分もしないうちにノックする音がして、神崎が入って来た。

「神崎さん、昨日、西神坐島に行って色々調査してきたようですが、どんな様子でしたか？」

「港やリゾートに至る道には“リゾート開発反対”の看板が林立していました。地元民とカムザの関係は想像以上に険悪です。カムザ側は反対派の妨害を恐れて、リゾートの周辺に厳重な警備体制を敷いています」

「すると簡単には、リゾートの内部には入れないのですか？」

「ええ、車道は正面入り口に通じる舗装道路と、裏手に通じる林道の二つしかありません。メイン車道にはゲートが設けられていて、二十四時間体制で警備しています。裏手の林道はカムザ川の中流の河川栈橋に通じていますが、その栈橋にも警備員が詰めているとのことですよ」

「その警備ポイントを迂回して、車道に入り込むことは無理ですか？」

「迂回して入り込んでも、車道には要所、要所に監視カメラなどのセキュリティシステムが設置されているでしょう」

「うーん、そうか……その他に侵入する方法はないのかな？」

「その他の方法は無いではないですが、非常に困難を伴います」

「どんな困難なのですか」

「車道以外には獣道のような細い道がありますが、この道はジャングルで覆われており、鉈やナイフで枝葉を切り開いて進まねばなりません。しかし我々はどうにか通れたとしても、先生をこのルートで連れ帰るのは無理でしょう」

正剛を連れ帰るためには、車道を使って車でリゾートに行く以外に方法はないようである。一緒に聞いていた理紗もどうしたものかと俯いて考え込む様子であったが、何か思いついたのか顔を上げた。

「いきなり押し掛けて、面会を求めるより、まずは電話で申入れをしてみてもどうかしら。諒輔は先生の息子なんだし、父に会わせて欲しいと申出れば、もしかしたら会わせてくれるかもしれ

ないわ」

そんな甘い相手ではないが、一度は申入れをしておくべきと思い直し、“だめもと”で電話してみることにした。諒輔がカムザリゾートに電話すると、社長室長の星嶋という者が出て、『現在、先生は患者の治療中なので、どなたであってもお会いすることはできません』と無機質な調子で答え、『父は何時、診療所に戻れるのか』という問い掛けには、『患者の容態次第と聞いております』とこれまた、取り付く島もない。星嶋の誠意のかけらもない対応には腹が立ったが、想定内のことである。三人は改めて協議を開始した。

その結果、正剛を連れ帰ることが目的であり、諍いを起こさないで済むように務めることを基本とし、それが叶わない場合は、呪力を含む実力を行使してでも正剛を連れ帰ることにした。また車を用意して、カムザリゾートの正面に通じる舗装車道から進入すること、およびに、西神坐島には諒輔と神崎の二人が行き、理紗は連絡役として東神坐島で待機することが確認された。

諒輔と神崎の二人が拓馬の運転するクルーザーで西神坐港に着いたのは正午を少し過ぎた頃であった。西神坐港はこの島で唯一、大型船が停泊できる港であったが、漁港も兼ねており、栈橋にはカムザ建設用の船舶と漁船が入り混じって係留されていた。拓馬はクルーザーを、巧みな操船で横付けした。

栈橋の先には、定期船の待合室や漁業組合の建物などがあり、その周辺の至る所に開発反対の看板が立ち並んでいる。拓馬をクルーザーに残して更に歩いて港の外れに行くと、そこに軽トラックが一台置かれていた。拓馬があれこれ手をつくしてやっと確保した車である。学生時代のアルバイトで軽トラックを運転した経験のある諒輔が運転席に座り、神崎が助手席に座った。あまりにもぼろい車だったので、果たしてエンジンがかかるか危惧したが、意外や一発でエンジンがかかった。

“リゾート建設反対”“環境破壊を許すな！”などの看板が両側に立ち並ぶ道をしばらく走ると、前方にゲートが見えて来た。ゲートには二名の警備員しかいないようだ。これぐらいの相手なら難なくゲートは突破できるだろう。ゲートの手前で車を止めると一人の警備員が駆け寄って来た。

「カムザリゾートに行かれるのですか？」

「ええ鮫島社長にお会いしたいのだが」

「約束はとられているのでしょうか？」

「いや、とってはいない」

警備員は怪しい奴と判断したのだろう、片手を上げて、もう一方の警備員に注意を促した。注意を受けた警備員は胸に留めていた無線機のマイクを手に持ち、何かあればすぐ通報する体勢である。

「それでは、通すわけには行きません。お引き取り下さい」

警備員は腰のケースから特殊警棒を取り出すと、柄の先を引き伸ばした。この警備員、言葉遣いは丁寧だが、良く訓練されているようで油断ならない。警備員の制服の胸や肩袖にドーマンの九字紋が縫い付けられている。この警備員は道真神威教の信徒で、ウエットスーツ姿で襲ってきた者達の一人かもしれなかった。

「それでは社長室長の星嶋さんに伝えて貰おうか、先刻電話した三輪諒輔が父に会いに来たと……」

社長室長の名前を持ち出すと、無碍に追い払うわけには行かないと思ったのであろう、警備員は無線機を持っているもう片方の警備員に星嶋に連絡するよう指示した。

(さて星嶋はどう出るか)

もし、星嶋がゲートを通さないようなら、いよいよ実力行使である。神崎はすでにやる気満々で、何時でも飛び出せる姿勢をとっている。無線機の警備員は報告した後、じっと相手の返答を待っているようであったが、ようやく星嶋から指示が帰ってきたらしくこちらにやってきた。

「通していいそうです。社長室長の指示です」

報告を受けた警備員は、忌々しげに舌打ちすると、特殊警棒を元に戻し、ゲートに向かった。二人の警備員がゲートを押し開ける。諒輔は警備員に向かい敬礼の仕草をして、ゲートを通り過ぎた。

カムザリゾートの本館は、ベージュ色の三階建、九十九折の急な坂道を上り詰めた先にあった。建物は背後と左右の3方が密林で囲われており、いかにもジャングルリゾートらしい。設計図によれば、視界が唯一開けた前面に、レストラン、結婚式場、コンベンションホールなどの主要施設を配置していて、それらの施設からは海が遠望できるレイアウトになっているようであった。

豪勢な造りの車寄せに、ポンコツの軽トラックを止めるのは気が引けたが、ホテルの制服を着た者が数人待ち構えていて、停車した車のドアを開けた。

「社長室長がお待ちしています」

中の一人がそう言って、諒輔と神崎を館内に案内した。入口を入ると、そこは三階まで吹き抜け構造になっており、壮大な熱帯植物園といった趣になっている。ただ、工事途中の箇所がいくつかあり、作業員があちこちで造成工事をしている。ホールの中央と思われる箇所には、水を湛えた円形の噴水施設のようなものがあつた。

突然、その施設に水しぶきが上がった。見上げると、天井付近から大量の水が落下している。人工の滝にしても、落差がこれほどあると迫力である。どういう仕掛けか音はさほど大きくない。

滝のモニュメントの横を通り過ぎると、前方にフロントがあり、瘦身長髪、黒のスーツ姿の男が立っていた。諒輔と神崎が近づくのを、無表情にじっと見つめている。縁なし眼鏡の底の冷たい眼差し、削げた頬、あの男が社長室長の星嶋であろう。

「カムザリゾートにようこそ、社長室長の星嶋です」

無機質な声で、星嶋が挨拶した。

「三輪諒輔です、父を迎えに来ました」

隣で会釈する神崎を星嶋は無視した。

「三輪先生は、現在、患者を診ておられます。しばらくすれば患者への処置が終わるでしょう。それまでの間に、社長の鮫島があなたにお話したいことがあるそうです」

「ほう、実は私も鮫島社長にお会いしたいと思っていました」

「そうですか、ではご案内します。そちらの方はあちらのロビーでお待ち下さい」

有無を言わせぬ口調でそう言うと、先になって歩き出した。神崎の背後には、フロントの奥から出て来た数人の警備員が寄り添い牽制する。諒輔は目顔で『抵抗するな、言われた通りしろ』と神崎に指示し、星嶋の後に続いた。

三階の一番奥まった部屋に諒輔は案内された。スイートタイプで豪華な造りではあるが、社長専用の部屋というわけではなさそうで、宿泊客向けのものようだった。そのリビングのソファに巨漢という形容がぴったりの男が葉巻をくゆらせて座っていた。幕内の相撲力士ほどの体格であるが、白い長袖のシャツを着て、生成りのズボンを赤いサスペンダーで吊っている。年の頃は50前後か、ヒトラー風に七三に分けた頭髪の下の色が異様に白い。小さな目と分厚い唇がなんともアンバランスである。諒輔が近付いても腰を上げようとせず、呆けたような表情で諒輔を眺めている。

「社長、三輪先生の息子さんをお連れしました」

至道が微かに頷き、葉巻の煙を吐き出した。星嶋が諒輔に席に座るよう言い、自分は至道の背後に回り、両手を前で組み待機の姿勢をとった。

「三輪諒輔です、父を迎えに来ました。父は治療処置中とのことですが、終わり次第、連れて帰ります。よろしいですね」

至道は、諒輔の話しに興味が無いというように、眼を合わせようとしなない。

「君の父君は立派な医者だな、先生のお陰で、たらちね様は一命を取り留めることが出来たよ」

至道は諒輔の問いに答えず、自分の言いたいことだけを述べる。至道が我儘勝手であるとの情報は当たっているようだ。

「たらちね様？」

諒輔の疑問の声に対しても至道は反応を示さない。

「それにしても、危ういところだった。まさか陰の長者がああ島にいたとはな」

至道の口から陰の長者の名が出たので諒輔は緊張した。至道は諒輔が陰の長者だと知っているのだろうか。

「君の恋人なのかね、安倍理紗とかいう娘……安倍晴明の直系の子孫らしいな」

至道はどうやら理紗が陰の長者と思っているらしい。悪霊払いを理紗がしたという噂話が早くも、至道の耳に入ったのだろう。

「いいか、その娘によく伝えておけ、早急に神坐村から出て行けと……今回はたらちね様の命に別条なかったから報復することは止めておくが、島から立ち去らない場合は容赦しないとな」

その時、携帯電話の鳴る音がした。後ろに控えていた星嶋が携帯を耳に当てる。何やら報告を受けているようだったが、携帯を耳から外すと至道に向かい「処置が終わったようです。ご教祖様の容態は安定しているとのことですが、どういたしますか？」と伺いを立てた。

「息子さんがこうして迎えに来ている、こちらに先生をお連れしろ」

至道はそう言うと、気だるそうに“あっちへ行け”というような仕草で手を振った。

「間もなく先生は戻ってきます。先生の部屋まで案内します」と星嶋は告げ、諒輔に退室するよう促した。

諒輔は傲慢無礼な至道の態度に腹が立ち、自分が陰の長者であることを明かして、この場で至道を懲らしめてやりたいとの誘惑に駆られた。しかし父の救出を何よりも優先させなければならない。じっと我慢して、言われるまま席を立ち退室した。

案内された正剛の部屋も三階にあり、スイート仕様であった。正剛はまだ戻っておらず時間つぶしに窓から外を眺めてみた。この部屋からは海は見えないが、樹海のようなジャングルの樹上が見渡せる。そのジャングルに埋まるようにして、古代遺跡のような建造物が見え隠れしている。カンボジアのアンコールワット遺跡を模したものだろうか、その遺跡風の建造物は熱帯樹林に覆われており、荒廃した神殿のようでもある。人工のものとしては中々良くできている。カムザリゾートの設計図にも確かこのような遺跡風の施設が描かれていたようだったが、どのような利用目的かなど詳細を神崎から説明を受けなかった。後で神崎に聞けば、この施設がどのようなものか分かるだろう。



外を見るのにも飽きてソファに座った時、ドアが開く音がした。諒輔は立ち上がり部屋の入口に向かった。

「おう諒輔！ 迎えに来てくれたんだってな」

現れた正剛は思ったよりも元気そうである。

「無事だったんだね、みんな心配したよ」

正剛の後ろに星嶋が居るので、詳しい事は後で話し合おうと決め、正剛に帰り仕度をするように言った。正剛はそこらに散らばっている品を無造作にバックに詰め込んだ。

「これは先生の携帯電話ではありませんか？」

星嶋が手にしたものを正剛に見せる。

「おっ！ 探していたんだよ、どこにあった？」

正剛は携帯電話を受け取り嬉しげだ。

「エレベーターホールに落ちていたそうです、掃除係がを見つけました」

「ああそうか、見つかってよかったよ」

正剛は疑うこともなく、携帯をズボンのポケットにしまうと諒輔に声をかけた。

「それじゃ行こうか、お前そっちの医療靴持ってくれ」

正剛は帰り支度を瞬く間に終えた。正剛も早く帰りたい一心なのかと可笑しく思いつつ諒輔は医療靴を手にした。

星嶋は、社長が礼を言うため自分の部屋で待っていると告げた。しかし正剛も諒輔もその申出

を断った。星嶋は一瞬困惑した表情を浮かべたが、すぐに元の無機質な顔に戻り、神崎が待つ一階ロビーに案内した。

診療所に着いたのは午後五時を少し過ぎた頃であった。電話で連絡してあったので、診療所には結衣と看護師の他に、理紗、富紀、真俊、拓馬も待っていて正剛の無事帰還を喜んだ。諒輔は帰りの船の中で、正剛からカムザリゾート往診のあらましを聞いていたが、まだ何も聞かされていない者たちは、正剛から話を聞いたがった。正剛は求められるまま、その一部始終を語り出した。

昨日の朝、迎えの車に乗って北港に行き、KAMZAのクルーザーで西神坐島に向かった。向こうの港には社長室長の星嶋が出迎えにきており、リゾートに向かう車の中で患者の様子を正剛に伝えた。患者は至道の母で道真神威教の教祖、鮫島サイであり、八十過ぎの老婆である。しかし単なる病気というのではなく、サイはいわゆる植物状態であり、人工心肺と人工栄養によりかろうじて命を永らえていた。最新の医療設備と専任の看護師に守られてここ暫くずっと安定していたが、昨日の未明、突然、生命維持装置が危険信号を発した。看護師は自分の手では対処できないとして、主治医の指示を求めたが、生憎、東京在住の主治医は海外の学会に出かけていた。仕方なく脳病理学に精通した専門医を求めて、必死で探したところ、意外にも直ぐ近くに該当する医師がいることが判明した。それが正剛と言うわけであった。正剛は以前、東京の大学病院で脳外科の医師として勤務した経験があったのである。

カムザリゾートに着くと、鮫島社長が待っており、人目も憚らず、たらちね様を助けて欲しいと正剛に哀訴した。たらちね様とは母親のサイのことで、道真神威教では、サイのことを、ご教祖様とか、たらちね様と呼んで崇敬しているようであった。

正剛が案内されたのは、ジャングル内の遺跡のような建造物であった。内部は迷路のようになっており、リゾートのアトラクション「古代遺跡ラビリンス」として建造されたとの説明であった。この建造物の深部にサイの為の医療施設があり、直接通じるエレベーターに乗り込みサイのもとに向かった。

診察すると、かすかに自発呼吸があり、脳波も見られたので脳死してはおらず、植物人間状態であることに間違いなかった。植物人間とは遷延性意識障害の俗称であり、重度の昏睡状態に陥った患者のことを指す。脳波を分析したところ、極度の興奮状態となった形跡があり、今もまだかなり興奮しているようなので、沈静剤を投与し、しばらく様子を見ることにした。一緒についてきた至道は、その間も取り乱した風で正剛に哀願を繰り返したかと思うと、次の瞬間怒りを爆発させ「陰の長者め、この仕返し必ずしてくれる」などと喚いた。こちらにも鎮静剤が必要だと思いつつ待つ内に、サイの状態がかなり安定してきた。脳機能がかなり低下しているので、ドーパミン系の薬剤を投与すると、サイの状態は更に安定度を増してきた。

正剛が危機を脱したことを至道に伝えると、至道は正剛の手をとって泣きながら感謝の言葉を述べた。そして村長の許可もとっているのです、今日一泊して明日も治療をして欲しいと訴えた。仕方なく一泊することを正剛は承知した――

正剛の話を皆、熱心に聞いていたが、話が一段落すると、結衣が不満顔で問いかけた。

「でも先生、何で一言連絡してくれなかったのですか？ 富紀さんとても心配したんですよ」

富紀も理紗も一緒に頷く。

「いや、済まん。一泊することになった時に電話しようとしたのだが、どうしても携帯が見つからなかったんだよ」

「それは父さん、彼等が隠したに違いないよ」

「そうかな、彼等が俺の携帯を隠さなきゃならん理由があるのか？」

「彼等は父さんが直接交信できる状態にして置きたくなかったんだよ……上手く回復しない場合はずっと留め置くつもりだったかも知れないし、サイが死んでしまうなんてことになったら、至道は父さんを無事帰したかどうか」

「なんだ、薄気味悪い事言うなよ」

「今回は治療が上手くいったからよかったけどね」

自分の父親ながら、疑うことを知らない医者馬鹿ぶりに諒輔は苦笑した。

元気そうな正剛の姿を見て安堵した一同は、それぞれ仕事に戻ることにした。理紗や真俊たちと共に“ヴィラ星の砂”に向かう車の中で、諒輔は、真俊を襲った鬼女はサイであり、諒輔の反撃に会い打撃を受けたという確信を深めていた。至道が呪殺鉄輪法により、植物人間のサイを生霊と化して真俊を襲わせたに違いなかった。

ところで悪霊には死霊と生霊がある。死霊の方が恐ろしいものと思われがちだが生霊も決して侮れない。源氏物語において六条御息所の生霊が、源氏の子を身籠った葵上に仇を為す場面は有名で、能「葵上」として脚色されたりしている。非常に強い霊力を有するサイであれば、その生霊もまた強大な力を持っていて当然であろう。

第九章 潜入

六月二十八日、諒輔、理紗、神崎の三人は石垣島に向かった。警察庁の日野から、道真神威教の対策を協議するために八重山署にやって来るので、この機会に情報を交換したいとの申し出があったからだ。当初、諒輔と神崎の二人で出向く予定であったが、理紗を東神坐島に一人にして置くことが危惧されたので一緒に行くことにしたのであった。

八重山署は石垣市登野城にあり、地上三階建ての堂々たる建物は、建築されてからあまり月日が経っていないのか、白い外装、赤い屋根が鮮やかである。諒輔達が受付で案内を乞うと二階の応接室に通された。

待つほども無く、日野が応接室に現れ互いに久闊を叙した。その後、情報を交換する中で、諒輔はカムザリゾートの古代遺跡風の建造物の深部に医療施設があることや、ポルトガル村の旧ホテルの地下に金庫室のようなものが設置されていることなどを日野に告げた。ところが意外にも日野は、それらのことを既に知っていた。

「実は、カムザリゾートには、秘密捜査官を潜入させています。その者は警視庁公安部でも指折りの優秀な捜査官で、これまでに重要な情報をいくつも知らせてきています」

「そうでしたか、でも大変危険な任務ですね」

「はい、もし身元が彼等に知られたら命は無いですよ。そこで相談なのですが……」

日野は一呼吸置くと、三人の顔を見渡した。

「その捜査官は非常に優秀ですが、潜入期間が長引くにつれ、身元が割れるリスクが高まっています。この局面であまり無理な捜査をさせる訳には行かないのです。そこで以前、箱根の研修所に潜入してサリンの調査をした経験のある諒輔さんに白羽の矢を立てた次第です」

「カムザリゾートに忍び込み、サリン関連の調査をして欲しいということですか？」

「ええ、陰の長者にこんなことをお願いするのは心苦しいのですが、至道一味がサリンを保有している証拠さえ掴めれば、サリン防止法違反容疑で奴等を一網打尽にすることが可能なのです」

日野の話によれば、古代遺跡風の建造物の地下深部に道真神威教の各種施設があって、その施設の一つがサリンの貯蔵庫であるらしい。そこに忍び入って証拠を収集して欲しいということなのだ。それらの施設に入るには、正剛も使用した直通エレベーターを使うのが最も簡単な方法であるが、そのエレベーターは厳重なセキュリティ対策が施されており、部外者が使用することは不可能とのことであった。侵入するには、宿泊客用のアトラクションとして作られた迷路を通り抜けて地下に降りて行かねばならないという。

「もし、諒輔さんが引き受けてくれれば、捜査官が潜入の手引きをしますが如何でしょうか？」

至道とその一味を検挙できるのであれば、引き受けても良いと諒輔は思うものの、カムザリゾートの敷地内に入ること自体が先ず難しいだろう。

「神崎さん、車道を使わずにジャングルの中を歩いてリゾートに進入することは可能ですか？」

「前にも申し上げましたが、ジャングルの中を進むこと自体が大変なことです。更に彼等の警戒網に引っかからないように侵入するのは、並大抵のことではありません」

「夜間であれば彼等の目から隠れて入り込めるのではないですか？」

「ジャングルは陽が差し込まず昼でも暗いのです。ましてや夜は真の闇のような暗さです。とても進むことは出来ません。それにハブは夜行性で夜間のジャングルは極めて危険です」

「なるほど、車道以外を通して侵入するのは無理か……」

「いや、一つだけ方法があります。この地図をご覧ください」

神崎は持参してきた西神坐島の地図を卓上に広げた。

「ここに、流れているのがカムザ川ですが、カヌーなど底の浅い船で遡ると、この三段の滝の下あたりまで行くことが出来ます。川の途中に河川栈橋があり、そこに監視所が置かれているようなので、そこを上手く潜り抜ける必要がありますが……」

「そうですか、でも監視所は式神を使えば何とかなるでしょう」

「三段の滝の下に辿り着いたら、滝の横をロッククライミングの要領でよじ登らねばなりません。ここを登り切ると、カムザリゾートの裏山に出ることが出来ます」



諒輔にはロッククライミングの経験が無い。スポーツジムで何度かインドアのフリークライミングを試みただけである。カムザリゾートに入り込むことは、想像以上に大変そうだ。

「なんだか自信が無くなってきたなあ」

諒輔が思わず弱音を吐くとすかさず理紗が叱咤した。

「なによ、“なんくるないさー”が諒輔の身上でしょう、どんと引き受けたらどうなの」

手厳しい理紗の指摘に諒輔は閉口しながらも、日野の申出を引き受ける決意をした。諒輔と神崎が潜入することとし、秘密捜査員との接触方法など日野と綿密な打ち合わせをして、三人は八重山署を後にした。

警察署を出ると、神崎は沢登りやロッククライミングに必要な機材を調達してくると告げて二人と別れた。残された二人は石垣島の商店街で買い物と食事を楽しんだ。久しぶりに都会でデートしたような気分になった諒輔は上機嫌であった。

二十九日早朝、諒輔と神崎は拓馬の操縦するクルーザーで西神坐島に向かった。早朝の出発になったのは、潮の満ち引きや波浪の予想などから判断しての決定であった。今日の二人は、迷彩帽に迷彩服、ハブ防止用の編み上げ軍靴、防水リュックサックを背負うというスタイルである。

西神坐港には拓馬の友人が待ち構えていて、自分が店長をしているダイビングショップに車で案内してくれた。西神坐島は断崖絶壁で囲まれた島で、砂浜はごく限られた場所にしかないが、その友人はその数少ない浜辺に面した所で、ダイビングやカヌーツアーのガイドと用具のレンタルをしていた。

その店長の話によれば、カヌーで三段の滝まで遡ることは、以前に観光客用のツアーにも組み込まれていた位で、行くこと自体はそれほど問題ないが、途中にカムザリゾート用の河川栈橋があり、常時監視要員が詰めているとのことであった。

店長からルートの詳しい説明を聞き、装備を再点検すると二人はカヌーで海に乗り出した。浜辺の周辺はサンゴ礁で囲まれていて波は静かだが、河口に行くためにはサンゴ礁の外に出て、小さな岬を回り込まねばならない。幸い今日は風でサンゴ礁の外に出てもそれほどの波はなく無事河口に着くことが出来た。

河口はマングローブが密生しており、蛸の脚のような根を泥水に浸している。河口付近の河の流れは緩やかで、神崎と呼吸を合わせてパドルを使うと、滑るようにカヌーは進んだ。しかし、中流域に差しかかると、流れが少し急になり力を込めないと進まなくなった。それでもさほどの体力の消耗はなく、川面に覆い被さる樹木を時折掻き分けながら、順調に河を遡って行った。

神崎は、カヌーを漕ぐ手を休めると、腕時計で時の経過を確認し、前方に聳える山容を眺めていたが「そろそろ監視所です」と告げ、双眼鏡を諒輔に渡した。これからは神崎一人がパドルを使い、先頭の諒輔が双眼鏡で前方を探りながら進むことになる。神崎はカヌーを岸辺寄りにして、音を立てないように注意深くパドルを使った。やがて双眼鏡の視界に棧橋らしきものが見えてきた。

「河川棧橋があります」

「ラジャー、監視要員は見えますか？」

諒輔は双眼鏡で棧橋の周辺を見回す。

「監視哨のような小さな建造物があります、それから車がありますね、あっ、人がいます」制服姿の警備員が二人、煙草を吸いながら話し込んでいる。小休止といったところだろうか。銃器の類は携行していないようだが、胸にマイクを下げ、イヤホンをしている。無線で常時警備本部と連絡をとっているようだ。彼らに、絶対見つけられることなく通り過ぎなければならない。諒輔は神崎に、警備員が二人居ることを告げ、棧橋に近い岸にカヌーを着けるよう指示した。神崎は巧みにパドルを操って、棧橋から見えにくい岸辺にカヌーを着けた。そこは足場が悪く樹木が密生しているが、樹の枝に掴まり、なんとか上陸することができた。神崎にその場で待機するよう言うと、神崎はカヌーをロープで樹木に固定した。

諒輔はよじ登るのに手ごろな樹木に足を掛け這い上がった。すると、棧橋の様子が見えた。双眼鏡を目に当てると間近に彼等の姿が観察出来る。丁度、警備員の一人が車に乗り込むところであり、エンジンをかけると急な坂道を登って行った。交代のために二人いたらしく、一人が去って警備員一人が残された。

更に双眼鏡で付近を観察すると、棧橋に1台、監視哨に1台の監視カメラが設置されていることが見て取れた。棧橋のカメラは川の方角に向けられており、川を行き来する船を監視するものようであった。監視哨のカメラは警備員が立つあたりを映しており、警備員の様子をチェックする目的のようだ。

諒輔は、木の枝から下りると呪を唱え、犬麻呂・牛麻呂を呼び出した。犬麻呂には親鳥擬態の術を、牛麻呂には吐霧如乳の術を施すよう命じた。二人の式神は頷くと、密林の中を分け入って棧橋に近付いた。

犬麻呂は警備員に近づくと、腰の扇子を引き抜き半開きにすると、ふわりと空に投げ上げた。

扇子は空中で色鮮やかな尾羽を持つ鳥に姿を変え、警備員の足元に羽音を立てて舞い降りた。警備員は何事かと足元の美しい鳥を眺めている。鳥は怪我をしているかのように、バタバタと羽ばたきしながら地面を這いまわる。警備員が取り押さえようと近付くと、すっと一メートル程鳥は飛び退り、また地面で羽ばたきを続ける。これぞ、犬麻呂得意の親鳥擬態の術である。

その間に牛麻呂は栈橋の先端に立ち、扇子を広げて口元に宛がうと、川に向かって息を吐き出した。その息は乳白色をしており、ドライアイスの煙のように川面に落ちて広がり、辺りは濃い霧で包まれていった。これぞ牛麻呂得意の吐霧如乳の術

式神二人の様子を窺っていた諒輔は、頃や良しと、神崎に合図してカヌーを固定していたロープを解かせた。諒輔がカヌーに乗り込むと、なるべく音を立てないようにパドルを使って、乳白色の霧の中を進んだ。警備員はまだ擬態の鳥を追い回しているようで、難なく栈橋を通り過ぎることが出来た。しばらくしてカヌーを岸に寄せ、犬麻呂と牛麻呂を呼び寄せた。二人の式神は密林の暑さと湿気にぐったりした様子で、舌を出して、はぁ、はぁと忙しく呼吸をしている。熱帯の地、しかも昼日中に式神を遣うのは可哀想だったと気づき、充分に労って呪を唱え引き下ろさせた。



川幅が狭まり、流れが速くなってきて、二人は力を含め、息を合わせてパドルを漕いだ。しばらくすると行く手から滝音が聞こえ、なおも進むと滝が視界に入った。三段の滝はその名の通り、三つの滝が連続しており、一番上が上段の滝、真中が中段の滝、カムザ川に落ち込む一番下は下段の滝と呼び慣わされていた。諒輔と神崎は下段の滝のしぶきに濡れながら、カヌーのパドルを操って、どこか上陸できる所がないか探した。滝の落下する付近は切り立った崖になっており上陸するのに適した箇所を見つけることは出来なかったが、少し離れた所に何とか上陸出来そうな所が見つかった。二人はカヌーから降りると腰まで水に浸りながら、協力してカヌーを陸に引き揚げ、中から防水リュックサックとロッククライミング用のザイルやヘルメットなどを持ち出した。

簡単な糧食と水分をとり、防虫薬を手や、顔、首筋などに入念に塗り込んだ。ヘルメットを被ると用意はすべて整った。これからは神崎が頼りである。リュックサックを背負い、ザイルを肩にすると神崎の後について、下段の滝の取り付き口に向かって歩き出した。

密集するシダの群れを掻き分けてしばらく行くと、下段の滝の中程に出た。威嚇するような轟音が諒輔を怯ませたが、神崎は平然と「これから沢登りです」と挑むような口調で告げた。先に神崎がのぼり、そのルートを辿り諒輔が進む。滝の飛沫で濡れる岩場は滑りやすいので、足元を良く見ながら登るべきだが、高所恐怖症の傾向がある諒輔は下をあまり見ないようにしようと決めていた。

沢登りは初めての経験だったが、スポーツジムで数回行ったフリークライミングの経験が思い

のほか役に立った。ジムのインストラクターから、三点ホールドなどの基本は教えられていたので、それを思い出し基本に忠実に、ゆっくり着実に身体を上を移動させていった。また、ジムで筋肉トレーニングをずっと続けていたことも、大いにプラスになった。

やっと下段の滝をクリアした。これだけでも大変な思いをした諒輔は、中段、上段の滝を仰いでため息をついた。しかし今さら引き返すことは出来ない。何が何でもこの滝を登り切らねばならないと観念し、「よし！ 行くぞ」と自分に気合を入れた。

中段の滝は沢登りに慣れてきたこともあり、神崎に助けられながらなんとか登り切ることが出来た。問題は最後の上段の滝である。神崎の説明によると、上段の滝の最終部分は急な前傾壁になっていて、ここをクリアするには高度の技術と体力が必要とのことであった。体力はともかく、技術のない諒輔は途方にくれたが、神崎が先に上まで登り、ザイルを降ろすので大丈夫だと励ましてくれた。

一息入れて、上段の滝にアタックを開始する。なるべく下を見ないようにしているが、足場が悪いところでは下を見ざるを得ない。はるか下方に川の流れが白く光っている。引き上げたカヌーはちびた鉛筆ほどしかない。ザワザワとした感触が下腹に走り、腰が抜けそうになったがどうか踏ん張った。

いよいよ最終部分に差しかかった。神崎はリュックサックを諒輔に預け、ザイルを襷掛けにすると、前傾した壁を登りだした。神崎は、両手だけを使って突き出た棚状の岩を這い上がり、身体を揺らした反動で、岩の裂け目を飛び越えるなど、超人的な動きをして遂に滝の最上部に辿り着いた。ハラハラして見守っていた諒輔は大きく安堵の息を吐いた。ザイルが投げ降ろされ、二人のリュックサックを結わえつける。神崎がそれを引き上げると、次は諒輔の番である。ザイルを腰に確り結びつけると最終難関に挑んだ。ザイルで確保されているという安心感があり、また神崎が上手に引き上げてくれたので、漸く諒輔も上段の滝を登り詰めることが出来た。

小休止の後、灌木を掻き分けて進むと、意外にも登山道のような一人一人が通れるほどの道に出た。その道の先には展望台らしきものが設えてある。カムザリゾートの宿泊客がそこから、三段の滝を眺める為のものと思われた。であれば、展望台と反対の道の先はカムザリゾートに通じているはずである。付近にセキュリティ設備がないことを確認すると、ヘルメットを脱ぎ、ザイルなどと共に茂みに隠して道を下って行った。

注意深く進む内に下方にベージュ色の建物が見えてきた。この分ではカムザリゾートまで数十分以内に着くことが出来ると思われたが、下るにつれ、道の両側の樹木の密度が増して行き、ジャングルの様相を色濃くしていった。鬱蒼と生茂った枝葉が、日の光を遮り昼日中と言うのに薄暗い。朽ちた倒木の陰などに、ハブが潜んでいるかもしれないと神崎に告げられた諒輔は、びくびくものであった。その姿を見た神崎は「後ろの人の方が、ハブに咬まれやすいので」と先頭を諒輔に譲ってくれた。

途中、熱帯特有のスコールに見舞われたこともあり、予想に反して一時間近くかかって漸くに光の差す開けた場所に辿り着いた。そこはカムザリゾートの敷地の境界とも言うべき所で、敵の監視エリアに立ち入ったことを意味する。神崎が首に下げていた双眼鏡を目に当て、入念に行く

手を眺め回した。

「遺跡のようなものが見えます」

神崎は方向を指差しながら、双眼鏡を諒輔に渡した。

「ああ、あれが古代遺跡ラビンスか」

ジャングルに視界を邪魔されて、その全容は見えないがそれが目指す建物であることは間違いないようだった。周囲に警備員などの人影は認められない。

「チェックポイントがどの辺りかわかりますか？」

双眼鏡を神崎に返ししながら、秘密捜査官が潜入に必要なものを隠している場所について訊ねた。

「ええ大体的見当はつきます。もっと、近付けば目印を見つけることが出来るでしょう」

「分かった、それじゃ先に進もう」

諒輔はすっかり元気を取り戻し逸り気味である。

「これからは敵の監視の目を十分に注意して進まなければなりません。私に続いて下さい」神崎は教え子に諭すように言って先に立った。

この先は、ラビンスを取り囲む密林の中に行くことになる。敵の気配を警戒しつつ進んで行った。

「確かこの辺りなんですけど.....」

神崎はメモを広げ確認しながら周囲を見回した。そこはラビンスから少し離れたガジュマルの生い茂る箇所であった。

「あっ、有りました」

神崎は一本の木の枝を、拾い上げ諒輔に見せた。木の枝の先が刃物で切り裂かれている。

「ここを掘ると何か出てくるのですね」

警察庁の日野との打ち合わせによれば、秘密捜査官が潜入に必要なアイテムを埋めてくれている筈だ。神崎がリュックサックから、スコップを取り出し掘始めた。

果たして、そこにはビニールで包まれたものが有り、その包みから道真神威教徒用の白い道服と白いズック二人分、ラビンスの迷路の手書き図面、それに車のキィが入っていた。車のキィは、敵に発見された場合に逃げ出す脱出用の車のもので、リゾートホテルの駐車場の一番奥に置かれているはずであった。諒輔と神崎は教徒用の道服に着替え、ズックに履き替えると脱ぎ捨てた服や靴などを茂みに押し込みラビンスの入り口に向け歩き出した。

先に行く神崎が振り返り、押し殺した声で「話声がします」と注意を促した。耳を澄ますと、成るほど複数の人の話し声が行く手から聞こえて来る。腰を屈め、忍び足で進み、樹木の陰から様子を窺う。白い道服を身に着けた十数名の男女の道真神威教徒がラビンスに向け歩いて行く。なおも観察を続けると、信者たちはラビンスの入り口から中へと入っていった。その様子を見た諒輔と神崎は互いに見合って頷くと、小走りに走ってラビンスの入り口に向かった。

間近に見る遺跡風の建造物は、黒褐色の長四角形の岩石を組みあげて造られており、熱帯樹の

根が絡まったり、苔むしていたり、或いは今にも崩れ落ちそうになっていたりと、いかにも廃墟の神殿のようである。入口の両脇には、神獣の石像が、またその奥には警備員が一人立っている。咎められるのではと危惧したが、諒輔と神崎が近付くと、早く中に入るよう急ぎ立てられた。

思いがけずラピリンスの内部に、楽々と進入することが出来、拍子抜けするほどだったが、先に入った信者の姿はすでになく、これからは自力で迷路を通り抜けて、地下の道真神威教の施設に辿りつかねばならない。捜査官が描いた図面と見比べながら進むことにする。

内部は薄暗く、廃墟を模した造りであるが、宿泊客用に作られたアトラクションなので、所々に照明があったり、非常用出口の表示があったりして、本物らしさは今ひとつである。分岐点など要所要所に、入口にあつた神獣の石像と同様なものが置かれている。手がかりになるのは捜査官が描いた図面である。ペンライトの光で見る手書きの図面は見難いうえに、不正確な表示もあって、行止まりにぶつかったり、もと来た道に戻ってしまったりと中々進むことが出来ない。そもそも立体的な迷路を二次元の図面で現すのは無理がある。諒輔は犬麻呂と牛麻呂を呼び出すと、道先案内するように命じた。二人の式神は、壁面や地面を嗅ぎ回っていたが、先に入った信者の匂いの痕を嗅ぎ取ったのであろう、迷うことなく諒輔と神崎を誘導して行く。目的の施設は地下に有るので、下方に降りて行くに違いないと思っていたが、犬麻呂たちは意外や上へ上へと進み、とある神獣の石像のあるところで立ち止まった。どうやら、この石像の裏側に道真神威教の地下施設に通じる入口が隠されているらしい。

どうしようかと思案していると犬麻呂は何か気付いたようで、もと来た道に走って行った。すぐに戻って来ると、誰かがこちらにやってくると諒輔に告げた。耳を澄ますと成るほど人声が近付いて来る。「おい、もっと早くしろ」「教主様の講話が始まってしまうぞ」などの声が聞きとれた。神崎も気付いて皆一緒に横道に入り込み姿勢を低くする。やって来たのは、白い道服を着こんだ信徒の一行で、男女合わせて十名ほどもいるだろうか。石像の前で立ち止まり、先頭の一人が何やら石像に触れると、奥に通じる秘密の扉が開いた。

「奴等の後に続きましょう」神崎の耳元で囁くと、信徒一行の最後尾に付いて扉の中に入り込んだ。辺りは暗い上に、一行は先を急いでおり、二人が増えたことに誰も気づかない。足早に進んで行くと、下に続く階段があり、三、四階分程も降りただろうか、漸く道真神威教の施設区域と思われる場所に到達した。

そこはやや広い空間で、明るく照明されたエレベーターホールであった。おりしも昇降箱が下降してくるところで、信徒一行は「教主様がお着きになるぞ、急げ!」「もたもたするな!」などと言い合いながら、奥に駆け込んだ。諒輔と神崎も一緒に付いて行く。一行は左右に開かれた扉の中に入ったが、諒輔達はそこを歩き過ぎ更に奥に向かった。通路の角を曲がり、踏み止まると顔だけ出してもと来た方を窺った。至道を先頭に数名の者が左右に開かれた扉を入る所であった。お付きの者の中に、社長室長の星嶋の姿もある。

捜査官の図面によると、今、至道達が入った部屋は道真神威教の教会のようだった。図面に書かれているのはそこまでで、更に先の施設部分がどのようなになっているかは見当がつかない。それでも秘密捜査官はこの地点までは来たことが有るということであり、成る程、優秀な捜査官だと感心した。

改めて辺りの様子を窺う。どうやら施設の人達は、こぞって至道の講話を聴きに教会に詰めているらしく人気は無い。これ幸いと、サリン貯蔵所があると思われる最奥部に進んで行った。すると行く手に病院のナースセンターのようなカウンターがあるのが見て取れた。その前の通路に看板が置かれている。そっと近付き、看板の文字を読む。

“これより先進入禁止 道真神威教親衛隊本部”

カウンターには制服姿の者が一人いて、監視カメラのモニターを見つめていた。今まで制服姿の者は単なる警備員だと思っていたが、彼等は道真神威教の親衛隊であるらしい。カウンターの背後の部屋がその親衛隊の本部のようなようであるが、ここからは内部の様子は窺えない。

今、諒輔達は道真神威教の施設の奥深くにいる。信者の道服を着ていたとしても、至道の講話も聞かずに徘徊している様子をモニターでチェックされたら、たちまち警報が鳴り響くことだろう。ここは式神を遣って、親衛隊員の注意を逸らし、その隙に最奥部に近づく他ない。屋外であれば、犬麻呂の親鳥擬態の術が有効だが室内では他の方法を使う必要がある。諒輔はしばし思案して、犬麻呂を呼び寄せると策を授けた。ところが犬麻呂は首を横に振って承知しない。諒輔は犬麻呂に本性の犬の姿になって、親衛隊員の注意を逸らす策を授けたのだが、式神にとって本性を晒すのは、かなり恥ずかしい事のように、中々承知しないのだ。駄々を捏ねた場合はこうするより仕方無い。

「また、デズニールランドに連れて行くから」と約束すると、犬麻呂はコックリと頷き、本性の犬の姿に変じた。その姿は柴犬より少し大きめだが、日本犬の特徴をよく現している。くるりと巻いた尻尾と引き締まった身体つきは、いかにも敏捷そうである。また円らな瞳と丸い眉毛が愛らしい。それにしても式神の二人は以前に一度連れて行った東京ディズニーランドが事のほか気に行ったようで、諒輔の思惑はまんまと的中した。

犬の姿に変じた犬麻呂は教会の前や、エレベーターホールの間を行ったり来たりして、親衛隊員がモニターで気付くよう頑張っている。しかし、隊員はモニターの中の犬の姿に中々気づかない。痺れを切らしたのか犬麻呂は警備カウンターの前にトコトコ歩いて行き、隊員の目の前の壁面に片足を上げて、おしっこをした。これには鈍感な隊員もさすがに気付いて「おい、そんなところにションベンするな！」と叫ぶとカウンターを飛び出した。犬麻呂はエレベーターホールの方に逃げて行く。その後を、慌てて隊員が追いかける。

トイレに通じる横路に隠れていた諒輔達は、この隙に警備カウンターの前を通り過ぎる。背後に耳を澄ますと、追いかけるのを諦めて戻って来た隊員が、入口にいる隊員と無線でやり取りしている声が聞こえて来た。

「おい、聞こえるか？ こちらに犬が一匹紛れ込んだぞ」

相手の声は聞こえない。

「入口でもっと確り見張ってなきゃ駄目だろう……ええ？ 猫一匹入り込ませないだと、何言ってるんだ、俺の目の前で犬がションベンして逃げて行ったんだぞ」など、言い合っている。

そうこうする内に、水干姿に戻った犬麻呂が帰って来た。親衛隊員はしばらく入口の隊員と侃侃諤諤していることだろう。

最奥部分のサリン貯蔵施設が有るとされる一画には、ロッカー室があり、その隣に防護服が吊り下げられた部屋があり、汚染物質を洗い流す除染室があった。これらの施設は、以前シュラ・コスメティックの箱根工場に忍び込んで発見したものと、ほぼ同様の配置である。諒輔は携帯電話のカメラでそれらを一通り撮影すると、最奥の貯蔵室に進もうとしたが、頑丈で密閉式の金属製の扉があり、入り込むことは出来なかった。金属製の扉は、ポルトガル村の旧ホテルの地下にあったものと、ほぼ同様の造りであり、重量感溢れるものである。この扉も一応写真に撮って、長居は無用とばかり、引き返すことにした。

そのとき、多くの人の話し合う声が聞こえて来た。至道の講話が終わって教会から信徒たちが出て来たのであろう。信徒の後ろに付いて、この迷宮から脱出しようと目論んでいたのも、急いで教会の方に向かった。ところが、何人かの人たちがこちらに向かってくる気配がする。このままでは彼等と鉢合わせしてしまうだろう。咄嗟に、近くの扉を開けて室内に滑り込んだ。

入った所は、壁も天井も白一色で、小さなホールのような趣である。中央には白い花で飾られた聖母像らしきものがあり、宗教的な儀式の場所のような雰囲気である。中央の聖母像近くにそっと進むと、右手に部屋の一部が見えた。医療機器らしきものがあり、消毒薬の匂いが漂ってくる。

(ここが、たらちねの間か?)

諒輔と神崎は顔を見合わせると、そっと病室らしき右側の部屋に入る。犬麻呂と牛麻呂も忍び足で後に続く。部屋の奥まった所がカーテンで仕切られており、その向こうにベッドがあるらしい。部屋の壁面に沿って医療機器がびっしりと据え付けられており、計器の表示盤には波型の図形が流れていたり、刻々と変化する数字が明滅したりしていた。

カーテンを押し開けて、そこに横たわる人物を観察した。白髪、痩せこけた身体、皺だらけの手足、それは、生霊となって真俊に襲い掛ったあの老婆に違いなかった。脳波計、心拍計、血圧計などの計器類の線と、点滴、胃瘻、排尿などの管で全身を繋がれており、口には酸素マスクが宛がわれている。ユタの幸枝が見た、生霊の身体に生えた細い蛇のようなものは、これらの線や管であったのであろう。諒輔が見た生霊は、口が河童のように尖っていたが、これは酸素マスクの形が現れたものに違いなかった。至道の母のサイが植物人間状態であることは、正剛の話で承知していたが、実際に間近でこうして見ると、いかにも痛ましい。

「そこにいるのは、誰なの！」

突然背後から声を掛けられ、驚いて振り向くと看護師と思われる白衣の女性が病室の入り口で立ち竦んでいる。その声に神崎が反射的に反応して看護師目掛けて突進した。それを見た看護師は恐慌をきたして、悲鳴を上げて逃げだしにかかる。神崎は看護師を取り押さえて、口を塞ごうとしたのだろうが、看護師の逃げ足は思いのほか速く、廊下の外に飛び出すと、大声で助けを求めた。

廊下の外は至道の講話が終わったばかりで、かなりの人がいたこともあり、信徒と親衛隊員が雪崩を打つように部屋に押し寄せて来た。

諒輔は犬麻呂と牛麻呂に退路を確保するよう命じ、その後を追った。神崎は諒輔の背後をガードしながら付いて来る。二人の式神は、白い道服を着た信徒たちは簡単に排除していたが、親衛

隊に対してはどうしたことか手が出せないでいるようだ。隊員の制服にはドーマンの印が縫い付けられている。そのため手出しができないのだろう。

そのため親衛隊に対しては、諒輔と神崎が相手になり進路を切り開いた。どうにかエレベーターホールまでやって来たが、そこには社長室長の星嶋がいて、諒輔達が近付いて来るのを冷やかに見つめていた。至道の姿は無い。既にエレベーターで上に向かったのだろう。諒輔と星嶋の目が合った。

「お前は、あの医師の息子.....なんで、お前がここに居るのだ？」

「何処に居ようとこちらの勝手だ、それよりそこをどけ、邪魔だ！」

二人は対峙する形になり、式神を含む周囲の者は争うのを止めて、二人を取り巻いた。

「私が邪魔なら、実力で追い払ったらいいだろう」

星嶋はスーツの上着を脱ぎ捨てると身構えた。空手かカンフーを使うようだ。

「武術なら私が相手をしましょう」神崎が前に出て星嶋と向かい合う。

神崎は星嶋に無視され続けているのが我慢ならないようであった。

図らずも神崎と星嶋との一対一の闘いが始まった。両者実力が伯仲しているようで、中々勝負がつかない。周りの皆は固唾を飲んで見守っている。

その間、諒輔は一步引き下がると、牛麻呂に吐霧如乳の術を行うように命じた。牛麻呂の口から吐き出される息は濃い霧となり、床を這い広がると、次にもうもうと立ち昇り、辺り一面は乳白色の霧に包まれていった。

神崎と星嶋の闘いは一進一退、決着がつかぬまま両者は、打ち合うことを止めて荒い呼吸をしている。霧が神崎と星嶋の回りにも立ちこめてきたのを見た諒輔は、神崎に近寄り、腕を引いて脱出することを告げ迷路に続く道に突き進んだ。

ラビリンスの出入口には数人の親衛隊員がいたが、蹴散らして脱出した。ジャングルに囲まれた屋外は蒸し暑く、犬麻呂と牛麻呂をこれ以上遣い続けることは出来ない。呪を唱えて二人の式神を引き下がらせると、諒輔と神崎はカムザリゾートの従業員用の駐車場に向け走った。後方から、多くの人が追ってくる声や足音が聞こえる。

ホテル棟の裏手に回り込む。従業員用駐車場の一番奥に、周囲の車から仲間外れにされたともいうように、一台の車がポツンと置かれていた。四輪駆動のランドローバーである。この車が、秘密捜査官の用意した緊急脱出用の車であるはずだ。諒輔が助手席、神崎が運転席に乗り込むと、神崎はキイを差し入れエンジンを始動した。

追いかけて来た親衛隊員たちは、駐車場の車に分乗しているところである。神崎は、タイヤを軋らせ急発進すると、それらの車の鼻先を掠めて走り抜けた。正面玄関を経てメイン道路に出る。追いかけてくる車の数は五台か六台か、追いつかれたらまた闘わねばならない。しかし追跡してくる車の様子を変だ。真っ直ぐに走行できないようで、そのうちの何台かは、道から大きく外れて停車してしまった。傾いた車体の様子から、どの車もパンクしていると察せられた。多分、秘密捜査官が細工したものであろうが、お陰で楽々と逃走することができた。

途中の検問ゲートには二人の親衛隊員が待ち構えていたが、諒輔と神崎は易々と一蹴して無事西神坐港に車を乗り付けた。港の入口には、スーツ姿の女と男が待ち構えていて、諒輔達の車に近付いてきた。港にも敵が待ち伏せしていたかと緊張したが、年の頃、四十代半ば、気の強そうな女性が何やら喚いている。

「遅かったじゃないの、私をこんなに待たせるなんていい度胸だわね」

車体にカムザリゾートのロゴが入っており、乗車している者が白衣の道服を着ていたので、迎えの車と勘違いしたようだ。

(でも待てよ、この女どこかで見たような.....)

「全く気が利かない人たちね、さっさとドアを開けたらどうなの」

その時、諒輔は思い出した。

(シュラ・コンサルタンツの元研修広報担当、現在は月暝の後を継いで社長の座にある鮫島穂来.....)

今日の穂来は、黒縁の眼鏡をしていないので思い出すのが遅れたのだ。諒輔は車から降りると、にこやかに笑いかけた。

「鮫島さん、お久しぶりです」

穂来は、怒鳴りつけていた相手から気安く声を掛けられて、(こいつは誰?)という表情をして一瞬黙り込み、まじまじと諒輔の顔を見上げた。

「あ！ お前は.....」

身長百八十五センチという背の高さが、諒輔の大きな特徴の一つである。穂来は見上げるうちに諒輔のことを思い出したようだ。

「この車をどうぞお使い下さい。他の車は皆パンクして使いものにならないですから」

諒輔は啞然としている穂来に手を振ると、神崎と共に棧橋の方に歩き出した

第十章 鬼女の家系

「ぼやっとしてるんじゃないよ、さっさと荷物を車に運びな！」

鮫島穂来は、隣に立ち竦んでいる秘書の掛川を怒鳴り付けた。掛川は弾かれたように動き出すと、足元のスーツケースやら鞆やらをランドローバーの後部荷物室に運び入れ始める。その間に穂来は助手席に納まった。

「一体何者ですか？」

運転席に乗り込んできた掛川が、萎縮する風もなく穂来に問いかける。穂来にはいつも怒鳴られており、この位ではなんともない。

「三輪諒輔、裏土御門陰の長者……」ポツリと穂来が呟く。

「陰の長者！ あのにやけたのっぽ野郎が？」

驚いて掛川は動きを止めたが、穂来に足を蹴飛ばされて、慌ててエンジンを始動させる。

「何でこの島にいるんだろう？ なにか嫌な予感がするね」

穂来は自問自答するように言いながら、車道の両側に建つ並ぶリゾート建設反対の看板を眺めた。

しばらく行くと、ゲートが見えてきた。近づく車を見て二人の親衛隊員は逃げ出しにかかる。ゲートの手前で停車し、車から降りた掛川が呼びかけると、隊員は漸く踏み止まりゲートに戻って来た。掛川が隊員を怒鳴りつけ、ゲートを開けさせる。

「親衛隊員が逃げ出すとはどういうことよ」

穂来は憤懣やる方ないといった調子で、運転席に戻った掛川に文句をつける。

「あの二人がまた戻ってきたと勘違いしたようです。彼らには手ひどくやられたばかりだと言っていました」

「道真神威教の精鋭と言われる親衛隊がこんな体たらくでは、先が思いやられるね」

穂来は毒づいて、掛川に車をスタートするよう命じた。

九十九折りの急な坂道を登り切ると正面にベージュ色の建物が見えて来た。道の両側には何台もの車が乗り捨てられている。車体が妙に傾いているので、多分パンクしているのだろう。

（いったい、どうなってんだい！）

ますます不快な気持ちを昂らせるうちに、カムザリゾートの正面玄関に到着した。

至道は三階のスイートルームで穂来と対面した。至道の後方には星嶋が、穂来の後方には掛川がそれぞれ立ったまま控えている。

「穂来、よく来てくれたな」

至道は小さな目を更に細め、分厚い唇を押し曲げた。それが至道の精いっぱい笑顔であることを穂来は知っているが、苛立ちはまだ収まっていない。

「何よ、港に迎えも寄越さないで」

「まあそう怒るな、それよりこのリゾートはどうだ？ 気に入ったか？」

「気に入るも何も、港と途中の道路にリゾート建設反対の看板が林立しているじゃないの。宿泊客はあれを見たら、端から興ざめよ」

「反対派に対する手立ては打っている。直に反対派は一人もおらぬようになるだろう」(兄のことだ、どうせ強圧的な手段を行使する積りなのだろう)と苦々しく思うがそれは口に出さず別なことを聞く。

「それにしても、陰の長者には大分やられたようね」

触れられたくない所を突かれたというように至道は表情を歪めて言い返す。

「いや、あの小娘が陰の長者とわかっていたらあのような不覚はとらなかったのだ」

さすがの至道も穂来に対しては防戦一方で、言い訳がましくなる。

「あの小娘……それって誰？」眼に力を込めて至道の顔を覗き込む。

「安倍晴明の直系の子孫の……ほれ安倍理紗とかいう」

「至道、あんたは陰の長者があの小娘だと思っているの」

穂来は呆れ果てたというように、大仰に天を仰いだ。

「おい、至道と呼び捨てにするな。何度言ったら分かるんだ、俺はお前の兄だぞ！」

至道は兄としての鷹揚さを装うのに堪え切れずに怒りを現す。

「陰の長者は三輪諒輔よ、安倍理紗じゃない」

至道の怒りなど歯牙にもかけず、ぴしゃりと言い放つ。

「三輪諒輔？ もしかしてあの医者の子か」

至道は振り向いて後方に控えている星嶋に問うた。

「はい、あの若者は確かに三輪諒輔と名乗りました。彼が陰の長者だったとは……」

星嶋も驚きを隠さない。

「うーむ、陰の長者と知らず、ここで相対していたのか」

「知っていたらどうしたと言うの？」

「決まっているだろう、我が一族にとって千年の怨敵、知っておれば必ずや仕留めていた」

穂来は皮肉な笑みを浮かべると、我儘な子供に言い聞かせるように至道に告げた。

「いい事、ああ見えても、三輪諒輔はあの月暝を打ち負かしたのよ。陰の長者なの。知らずに何もしなくて正解よ」

反論できずに押し黙ってしまった至道を更に問い詰める。

「ところで“呪祖鉄輪の法”を使ったというのは本当なの？」

「うむ、反対派のリーダーの漁業組合長がそれは頑固でな、漁業補償だの、港の使用制限だの言い出しおって放っておけなかったのだ」

「ああ、何て事！ それじゃまた母さんを生霊にしたのね」

「仕方ないだろう、俺一人じゃ“呪祖鉄輪の法”は使えない」

「今すぐ、母さんのところに案内して！ 母さん大丈夫なんでしょうね」

「大丈夫だ、今は安定している。よし、それでは一緒に“たらちねの間”に行くとするか」

至道は振り返り星嶋に、“たらちねの間”行きの手配を命じた。

ラビリンスの地下に通じるエレベーターに乗り、一行は“たらちねの間”に着いた。穂来は病室

の奥のカーテンを押し開き、管と線に全身を繋がれたサキの姿を見ると一瞬息を飲み立ち竦んだが、ややあって「ああ母さん……辛くはないの？」と絞り出すような声を発した。

サキが植物人間状態になってから、もう十年が経過している。若い人ならこのように長い期間を植物状態で生存を続ける例はあるようだが、サキのような高齢者がこんなにも長く生き続けることは奇跡に近いことである。サキの脳の力が尋常ではない強靱さを持っているということであろう。

穂来は見るに堪えないというように、眼を閉じると隣に立つ至道に囁いた。後ろに控える星嶋と掛川に聞こえないようにとの配慮である。

「ねえ、いい加減母さんに頼るのは止めたらどうなの？」

「今回は仕方なかったんだ、いつも母さんに頼っているわけじゃない」不貞腐れたように至道は呟く。

「至道、あんたもいい歳なんだしここで親離れしなさいよ」

至道は不服顔でそっぽを向いている。そんな至道を見つめて、穂来は子供の頃の記憶を蘇らせていた。

至道と穂来の母であるサイは蘆屋道満の血を引き継ぐ者として、幼い頃より呪術の力を発揮して周囲の大人たちを驚かせていた。そんなサイの才能を聞きつけた当時の阿修羅教団の幹部が身柄を引き取った。そしてその幹部の厳しい訓練を受けることになったが、いつしかサイはその幹部と男女の仲になり子供を産む。それが至道と穂来であった。

しかし相手の男は、好色で沢山の女に手を出し、サイは嫉妬に苦しむことになる。サイの心に鬼女の想いが宿るようになり、ある日サイは先祖から伝わる“呪祖鉄輪法”を使って男をとり殺してしまう。つまり至道と穂来の父親は母に殺されたのだ。



この事件を境に、サイの呪力の力は一層強大になり、教団内部でサイに敵う者は誰もいなくなった。その力を背景にサイは教団トップに上り詰めるが、二人の子供の父親を殺した自責の念による心の傷を抱き続ける。その傷の癒しの為に、サイは長男の至道を溺愛する。一方、穂来に対しては極めて冷淡であった。至道は身体が大きいというだけで、平凡な才能しか持ち合わせていない子供だったが、サイは盲目的に愛情を注いでいった。そもそも、蘆屋道満の呪力は、女系に引き継がれるので、穂来にはその才能がある筈であつたが、サイは穂来の才能を認めず無視した。

穂来もそんなサイに反発した。呪祖などの力に頼らず生きて行くことを決意し、高校生の時から親元を離れて暮らし、東京の大学では経営学を専攻した。卒業すると普通の会社に就職したのだが、その後、月暝がシュラ・コンサルタンツを設立すると、招かれてその幹部社員となったのであった――

子供の頃と同じように不貞腐れて黙り込む至道の横顔をみて、穂来は軽くため息をついた。母のこともさることながら、カムザリゾートの開業に向けた対策をこれから協議しなければならない。少なくとも反対派に対する、暴力行為などの強圧的対応は、即刻辞めさせないと大変なことになる。至道が問題を起こせば、関係を切ったとは言えシュラ・コンサルタンツや妹の穂来個人にも迷惑が及ぶであろう。

一行は地下施設の教主の部屋に移動して協議を始めたが、案の定、至道は自説を曲げず反対派をあらゆる手段で排斥して来月にも開業するのだと頑強に言い張った。こうなるとまるで子供で、いくら道理を尽くして説得しても耳を貸そうとはしない。そんな至道の性格を熟知する穂来は話題を変えることにした。

「ところで陰の長者は何をしにここに来たの？ 父親を連れて帰ったのでしょ、もうここには用がないはずなのに」

「彼等の目的が何なのか俺にも分からん、だが“たらちねの間”にいたところから判断すると、漁業組合長を襲った生霊の正体を調べに来たのかもな」

（確かにその可能性はあるな）と穂来は思いつつも、別の疑念が湧いた。

「ねえ、ほんとにサリンはここに貯蔵していないの？」

諒輔たちはサリンの貯蔵について調べに来たのではないかと思ったのだ。

「いや、サリンなどここにはない」

穂来は至道の小さな目が泳ぐのを見逃さなかった。それは嘘をつくときの至道の癖である。

（やはり、サリンを隠している）と穂来は内心思ったが、これまた追及したところで素直に白状するような兄ではない。今日はこれ位で切り上げたほうがいいだろう。

「少し疲れたわ、ホテルで休みたいから案内して頂戴」

そう口に出すと、本当に疲れがどっと出てきた。

「ああ、そうしたらいい、今日は良く休んで協議は明日するでしょう」

穂来の追求から逃れられると思ったのだろう、ほっとした表情で至道が答えた。

第十一章 拉致

今日は六月三十日、この島に着いてから二週間が瞬く間に過ぎ去り、明日は理紗が東京に帰る日である。当初の予定では諒輔も一緒に帰る予定であったが、至道一味との抗争が一段落するまでは島を離れるわけにはゆかず、神崎と共にもうしばらく残ることにしたのだった。理紗は仕事の都合が有り、そういつまでも休みを取ってられない事と、陰の長者と目されて狙われる危険性があったので、予定通り東京に帰って貰うことにしたのだ。

理紗は一人で帰ることを承知したが、最後にもう一度、美しい神坐の海でシュノーケリングをしたいと言う。諒輔にとっても、この島に来た翌日に見たサンゴと熱帯魚の美しさは感動的であったから、理紗の願いを叶えてあげたかった。拓馬に相談すると、神坐の沖合にはこの前の場所よりもずっと素晴らしいポイントがあるとのことであった。

拓馬の操縦するクルーザーで、沖合に向かった。天気は今日も快晴、濃紺の海に白い航跡が長く引かれて行く。今日の諒輔は前回に懲りて、ラッシュガードをしっかりと身に着けている。もちろん理紗も然りである。拓馬はインストラクターとして一緒に海に入るが、神崎は監視役として船上に残ることになっていた。

海の色がコバルト色になり、サンゴ礁の海域に入ったことが分かる。拓馬は慎重に船を操りサンゴ礁の間をすり抜けて行き、水深のやや深いところで船を停止し碇を降ろした。

「お待ちせしました、ここがこの辺りで一番きれいなシュノーケリングポイントです」

拓馬は自慢顔で言うと、満面の笑みを浮かべた。人気スポットらしく、少し離れた所にすでに数隻の船が停泊しており、その船の周囲でシュノーケリングをしている人達の姿が見えた。今日は絶好のシュノーケリング日和であり、石垣島など周辺の島から向かってくる幾つもの船影が遠く近く見受けられた。

だが気になるのは理紗の何やら気乗りしない顔色である。あんなに楽しみにしていたのにどうしたことかと訊ねると「少し船酔いしただけ」との答えである。それなら泳いでいる内に気分は回復するだろうと予定通りシュノーケリングをすることにした。

諒輔たち三人はマスクとフィンを装着すると、船の後尾の手すり付きの梯子（ラダー）から海に入った。先頭を拓馬が行く。十メートル程も泳ぐとそこはサンゴ礁で、色とりどりの魚が群れ泳いでいた。拓馬が手招きする方に近付くと、イソギンチャクの触手が揺れる中にオレンジ色の魚がいる。カクレクマノミだ。何年か前、ディズニーのアニメでこの魚を主人公にしたものが上映され、大人気になった魚である。その付近は枝状の珊瑚の群落で、宝石のように鮮やかな色をした小魚が行き来している。更に進むとテーブル珊瑚が辺りに広がり、黄色い魚が群れをなして目の前を横切って行った。



夢中で過ごす内に予定の時間が経過し、拓馬の指示でクルーザーに戻って休憩をとることになった。引き返すことにした辺りは、サンゴ礁の外縁とも言うべき所で、クルーザーからは大分離れている。この先の海の底は、崖のように急に深く落ち込んでいる。マンタも時折通るというので、外洋に続いているのであろう。

拓馬は「先に船に帰りますが、諒輔さんたちはゆっくりサンゴ礁伝いに船に戻って来て下さい」と言い残して、先にクルーザーに向け泳いで行った。諒輔と理紗を二人切りにして上げようとの拓馬なりの配慮かもしれなかった。しかし理紗には元気が感じられず、その様子が何となくおかしい。船酔いがまだ治らないのかと気遣うと、「実はね」と前置きして「先ほどから危険予知アラームが鳴っているの、こんな海の真ん中で何か起るとは思えなかったら、勘違いかもしれないとつい云いそびれていたのだけどやはり心配で……」

マスクを着けているので理紗の表情はよく伺えないが語尾が少し震えている。理紗には危険予知能力が備わっていることを知る諒輔は、マスクを取り外し、周囲を見渡した。エンジン音がする。外洋から近付いて来るのは大型のゴムボートであった。

その頃、船上の神崎も大型のゴムボートが諒輔達のいる方向に向かうのを見つめていた。ゴムボートはサンゴ礁の手前で止まると、ボンベを背負ったダイバーと思われる者4、5名が海に入るのが見て取れた。ダイバーは水中に潜ってすぐに姿を消した。神崎は道真神威教の襲撃に違いないと確信し、大声で呼びかけたが諒輔達に届かない。クルーザーの直ぐ近くまで泳いで来ていた拓馬は、神崎の声を聞くと大急ぎで船に上がってきた。神崎から敵の襲撃だと聞くと、緊急時用の発炎筒を取り出して発火した。

クルーザーに立ち昇る炎を見て、諒輔は緊急事態と覚ったが、その時、敵はすでに諒輔達が泳ぐ海面の下に迫っていたのだった。

「理紗、注意しろ！ 緊急事態だ！」

諒輔は隣で泳いでいる理紗に向け叫び手を差し伸べた。

「緊急事態？ 敵が襲ってくるの？」

マスクを取り去り諒輔の手を握り返してきた理紗は緊張で顔が強張っている。

その時、諒輔は強い力で海中に引きずり込まれた。海水を飲み込み、むせながらも海中でダイバーらしき者が諒輔の右足首を掴んでいるのが見える。息苦しくなり、やたら滅多ら手足をバタつかせ、身体を捻るとやっと掴まれていた右足が自由になり、海面に顔を出して息を吸うことが出来た。

理紗は大丈夫かと周囲を見渡すと、ぐったりとして仰向けになった理紗を、二人のダイバーが両脇を抱える様にしてゴムボートの方に連れ去ろうとしているところであった。その後方を数名

のダイバーがガードするように追う。諒輔は追い掛けたが、理紗との距離は広がるばかりであった。その時になって、神崎と拓馬の叫び声に漸く気が付いた。二人は手招きし、口々にクルーザーに早く戻れと叫んでいる。

(そうだ、あのゴムボートをクルーザーで追跡しなくては)

諒輔はクルーザー目掛け懸命に泳いで行った。



拓馬は、碇を上げ、エンジンを始動させクルーザーを諒輔の方に近づけた。しかし、周囲はサンゴ礁であり、僅かしか移動させることが出来ない。後は諒輔が泳ぎつくの待つしかなかった。その間に道真神威教のダイバーたちは、理紗をゴムボートに引き上げ、自分達も乗り込むと船外機を始動させ走り去ろうとしていた。

諒輔は精一杯泳いでいるのだろうが、それを待つ神崎と拓馬にはスローモーション動画を見るようでなんとももどかしかった。やっと諒輔が船に到着すると神崎が手を差し伸べて引き上げ、待ちかねていた拓馬がクルーザーを発進させた。

サンゴ礁の中から、外洋に出るには慎重な操船が必要であり、その間、ゴムボートとの距離は開いていった。しかし一旦外洋に出るとクルーザーはゴムボートよりも速度がずっと早く、距離は次第に狭まっていった。行く手の海上には山のような西神坐島の島影が浮かんでいる。

「理紗さまの姿が見えます」

先行するゴムボートを双眼鏡で探っていた神崎が叫ぶ。

「どうやら手足を縛られているようです」と言いながら神崎は双眼鏡を諒輔に手渡す。

襲われた直後、理紗はぐったりしていたので心配だったが、今こうして双眼鏡で見ると理紗の意識は回復しているようである。神崎が言うように、手足をロープ状のもので縛られており身動きが出来ないようだ。

クルーザーはゴムボートに接近し、理紗が助けを呼ぶ声が聞こえてくる。拓馬はゴムボートに接舷して諒輔たちが跳び移れるようにしようとするが、敵もジグザグに進路を変えるなどして容易に近づけさせない。ゴムボートの航跡が波となってクルーザーを上下させ、ゴムボートに近付いても跳び移るチャンスが中々見いだせない。行く手に西神坐島の島影が大きく迫ってきている。

。

「体当たりしますか！」拓馬が焦れて叫ぶ。

「だめだ、理紗が放りだされるかもしれない」諒輔が叫び返す。

拓馬は接舷をあきらめて、ゴムボートの先に回り込んで停船させる作戦を試みるが、小回りのきく相手は、するりと横をすり抜けてしまう。

西神坐島はもう目の前である。島に近いこの周辺は岩礁があり、注意しないと座礁してしまう恐れがあった。ゴムボートは、岩礁にはお構いなしにカムザ川の河口目掛けて突き進む。クル

ーザーは仕方なく、大回りして河口に向かうが、一足早く河口に到着したゴムボートは河口からカムザ川に進入し、上流に向け遡り始めた。クルーザーも少し遅れて後に続く。

しかし、川に入っても追い詰めることが出来ないまま、あの河川栈橋が見える辺りまで来てしまった。ゴムボートのダイバー達が河川栈橋から上陸するのは明白だったが、クルーザーでの追跡は河川栈橋の手前で断念せざるを得なかった。この辺りになると、川の水深は急に浅くなり、クルーザーではこれより先に進むことは出来なかったのである。

双眼鏡で敵を窺うと、ゴムボートを河川栈橋に接岸し、ダイバーたち数人で理紗を抱え上げて上陸する様子が見えた。親衛隊員が四、五名ほど待ち構えている。どうやら銃器で武装しているようだ。クルーザーが近付けば発砲するとでも言うように銃をこちらに向けて威嚇していたが、クルーザーがそれ以上近づかないことを確認すると、ダイバーから理紗の身柄を受け取り、傍らに停車していた車二台に分乗して、急な坂道を登って行った。

その様子を、歯ぎしりする思いで見っていた諒輔は「理紗を助けに行くぞ！」と叫んで、拓馬にクルーザーを西神坐港に回すように指示した。

日野に援護を要請しようとしたが、電波が届かない海域のようで携帯電話は使えなかった。港に近付いたところでやっと携帯が繋がり事情を話すと、『ちょうど強制捜査するための準備をしていたところです。しかし全てが整うまでもうしばらく時間がかかります。準備が完了したら連絡するので、それまでは迂闊な行動を慎むようにして下さい』と釘を刺された。しかし、諒輔にはそれまで待つ様な悠長な気持は微塵も無い。

西神坐港に着くと、栈橋に車を貸してくれる人物が待ち構えており、キィを渡してくれた。車は以前借り受けたあの軽トラックである。拓馬が船の無線を使って手配してくれた貴重な車であり、例えポンコツ寸前のような軽トラックでも調達出来て本当に有り難かった。

軽トラックは、以前と同じ港の外れに置かれていた。今回は思うところがあって運転は神崎に頼んだ。諒輔は助手席に乗り込む。パーカー、七分丈のパンツ、デッキシューズというスタイルは、これから敵地に乗り込む意気込みとはかけ離れていたが、表情はいつになく厳しく真剣そのものであった。ちなみに神崎の服装も、ティシャツにジーパン、スニーカーというスタイルである。

やがて行く手にゲートが見えて来た。予想通り銃器を手にした親衛隊員が待ち構えている。人数はいつもの倍の四名である。近づく車に銃口を向けている。

「奴らは銃を構えています」神崎がブレーキを踏み停車させた。

「神崎さん、私を信じて車ごとゲートに突っ込んで下さい！ いいですね」

諒輔はそう言うと、呪を唱え、印を結んだ。

「分かりました、全速力で突っ切ります」

神崎が力強く応えて、アクセルを踏み込み、ベレーキペダルにおいた足を外した。タイヤを軋ませて軽トラックが急発進する。

いつの間にか軽トラックは白い燐光で包まれていた。車の周囲に結界を張ったのだ。その白い結界は諒輔の怒りで形あるものに代わって行った。車を運転する神崎には、その形がどのような

ものか分からなかったが、親衛隊員たちは白い燐光が虎の形になるのを見ていた。白虎が襲ってくると恐怖した隊員は一斉に発砲しだした。しかし、結界に覆われた軽トラックに銃弾はどれ一つ当たらない。燐光を発しながら白虎はゲートに迫った。隊員が銃を撃つのを止め、慌てて道を開ける。白虎はゲートに躍りかかった。鉄製のゲートが一瞬の内に吹き飛ばされ、残骸が宙高く舞い破片となって落下した。隊員たちは落下物から身を避けるに必死であったが、気が付いた時には白虎の姿ははるかかなたに走り去ろうとしていた。

カムザリゾートに到着した。ホテル前には誰ひとりいない。そのまま裏手に回り、従業員用駐車場に駐車した。ここからは徒歩でラビリンズに向かう。密林を抜ける途中、以前迷彩服などを隠したところに立ち寄り、茂みの奥を探すと、幸いにもあの時の装備がそのまま残されていた。迷彩服に着替え、頑丈な編み上げの軍靴を穿き、迷彩帽を被ると、防水リュックから飲料ボトルを取り出し水分を補給した。

着替えた二人は戦闘モード全開といった高揚した気分で密林を進み、ラビリンズに近付いて行った。周囲を警戒しつつ入口に向かうが敵の気配が無い。それどころか入口の扉が開いたままになっている。

(至道の指示によるものだろうか？ 何かの罠を仕掛けようとしているのだろうか？)

「どうも様子がおかしいですね」同じ思いを抱いたのだろう神崎が囁く。

「うん敵の罠かもしれない、念のために式神を呼び出そう」

諒輔は呪を唱えて犬麻呂と牛麻呂を召喚し、この前と同様、ラビリンズの道案内をするよう命じる。

二人の式神の案内で、迷うことなく地下の道真神威教の施設の入り口であるエレベーターホールに到達した。途中、監視カメラで諒輔と神崎の姿がチェックされている筈だが、何の咎め立てもないのが不気味ではある。

どうしたものかと思案していると、こちらにやって来る足音がする。現れたのは社長室長の星嶋であった。

「ようこそカムザリゾートへ、たらちねの間で社長がお待ちです」

星嶋は表情を変えずに言うと、踵を返して歩き出した。星嶋に続き、一行は教会の前を通り、警備カウンターを過ぎてたらちねの間の前で立ち止まる。どうやら至道にとって最も有利な場所であるたらちねの間で対決する作戦のようだ。

「式神をたらちねの間に入れるわけには行きません。もしそこらに居るようでしたら退けて下さい」

「式神のことは分かった、しかしこの者は連れて行くぞ」

諒輔は後ろに控える神崎を見やりながら告げた。

「構いません、でも式神は認められません」

星嶋は互角に対戦した神崎をそれなりに認めたようで、入室を拒まなかった。諒輔は呪を唱えて犬麻呂と牛麻呂を引き下がらせると、星嶋に続いて神崎と共にたらちねの間に入った。

聖母の像のあるホールには十名ほどの親衛隊員が、緊張した面持ちで立ち並んでいた。星嶋は右手の病室の入り口を差し示し奥に入るよう促す。

病室では至道と穂来が壁際の椅子に座り待ち受けていた。至道は、丈の長い白い寛衣を身にまとい、大振りの勾玉を連ねた長い首飾りをしている。これが道真神威教の教主の正装なのだろう。穂来は何時もの黒のスーツ姿で足を組み、諒輔たちが入って来るのを不機嫌そうに眺めている。その横に掛川が立って控えていた。

「お前が陰の長者だったとはな」

至道は椅子から立ち上がると部屋の中央に歩み寄り諒輔を睨みつけた。星嶋が後に従い待機する。至道は巨漢であるが、背の高さは諒輔にやや劣る。しかし巨体から発する圧力は強烈だ。そんな二人の様子を穂来は相変わらず壁際の椅子に腰かけたまま見続けている。

「そうだ私が陰の長者だ、理紗は陰の長者ではない、すぐに開放しろ」

諒輔も至道の方に歩み寄ると、やや見下ろすようにして睨み返した。神崎は諒輔の背後をガードするように周囲に警戒の眼差しを向けている。

「安倍理紗が陰の長者でないことは、先刻承知だ、用が済めば解放して構わん」

いたずらっ子が何か悪巧みするときに見せるような、微かな笑みを至道は浮かべた。

「用が済めばだと、どういうことだ？」

「知りたければ教えてやろう、これを見るがいい」

至道は手を上げて星嶋に合図した。星嶋は奥に行くとカーテンを押し開いた。そこには二つのベッドが置かれており、手前のベッドに理紗らしい若い女性が横たわっている。赤い長襦袢のような着物を着せられているが、丈が短く膝から下はむき出しだ。どうやら赤い着物の下はラッシュガードのままのようであった。奥のベッドは植物人間状態のサイのものである。

「理紗！ 大丈夫か」諒輔は叫び、近付こうとした。星嶋がすかさず割って入り阻止する。

「死んではおらん、眠らせているだけだ……それより良く見るがいい、頭に何が被せられているかな？」

言われて理紗の頭をみると、なんと呪殺鉄輪の法で使用するあの鉄輪が、恰もティアラのように被せられているではないか。至道の思惑が分かり諒輔は怒りを爆発させた。

「至道、お前は理紗を鉄輪の法の生霊にするつもりだな！」

「さすが陰の長者、察しの良い事だ」

至道はせせら笑うと、おもむろに印を結び、呪を唱え出した。穂来はこの様子を見るや椅子から立ち上がり、部屋の奥のサイのベッドの側に行き、そのやせ細った手を握った。星嶋と掛川それに神崎もこれから始まる事態がただならぬものになると予感して部屋の隅に退く。

部屋が暗くなり始めていた。照明を切った訳ではなく、至道の立つ病室の中心から闇が湧きあがり広がって全体を覆って行くのだった。次第に濃くなる闇に至道の呪祖がうねるように響く。諒輔は怒りを鎮め、冷静さを保とうと気を丹田に集中し、理紗が横たわるベッドの辺りの暗がりを凝視した。

暗闇の中にぼうっと浮かび上がるものがあった。それは横たわる理紗の身体から発するもので、あたかも幽体離脱した霊のようであった。至道の呪文が、通奏低音のように流れる中、その呪

文に導かれるように靄のようなものは、ベッドからするりと床に降りた。しかし形はまだ定かではなく、微かに人形をしたものが、さわさわと蠢いているのであった。

至道の呪文が一段と強まると、人形の頭部に小さな三つの明かりが灯った。その明りが大きくなるにつれ、おぼろげだったものは今や、打杖を右手に握りしめた若い女の姿となって浮かび上がっている。蠟燭の灯りに照らされた顔は、理紗のものであるが、能「鉄輪」のシテが付けていた泥眼の面のようでもあった。

理紗の生霊は諒輔にじりじりと擦り寄ってくる。このままでは間もなく鬼女となり襲ってくるだろう。真俊に施したような生霊祓いをすれば退けることが出来るが、そうした場合、理紗に与えるダメージが大きい。最悪の場合、理紗は死に至るか、そこまで行かなくとも脳障害を引き起こす可能性がある。

（「呪祖返し」を使うしかない）諒輔は決意すると印を結び、呪を唱えた。

呪祖返しの法は裏土御門家に伝わる秘法であり、陰の長者しか扱うことが出来ない強力な呪術であった。始祖安倍晴明がこの法を使って、呪祖をかけた相手の陰陽師を死に至らしめたことが『宇治拾遺物語 巻第二の八 晴明、蔵人少将封ずる事』に記録されている。

理紗の生霊は諒輔との距離が狭まると、手にした打杖を振り上げ今にも襲いかかる姿勢を見せた。しかし襲う相手が諒輔であると感じ取ったのか、あるいは呪祖返しの法の効果が早くも現れたのか、理紗の生霊は固まってしまったように動かない。それを見た至道は顔を紅潮させ一段と声を張り上げた。それに感応したかのように理紗の生霊が動き始め、上げた手を振り下ろそうとしたが、諒輔が無言で気を放つと振り上げた手はそのままにぐるりと至道の方に向き直った。そして諒輔の気に押されるように、今度は至道の方に歩み寄って行く。

近付いて来る理紗の生霊に至道は慌てた。あらん限りの声を張り上げ、印を組んだ両手を激しく上下に動かして呪を唱える。しかし理紗の生霊はそんな至道の声に感応することなく振り上げた打杖を躊躇する様子もなく鋭く打ち下ろした。

避ける間もなく打ち据えられた至道は苦痛に顔を顰めたが、更に襲いかかってくる理紗の生霊を見て両手で頭を抱えた。

「待て、お前が打ち据える相手は俺じゃない！ 間違えるな」

至道は、喚くが理紗の生霊は容赦なく打ちかかって来る。

「もうよい、鉄輪の法は止めだ、元の身体に戻れ！」至道は納めの呪を慌ただしく唱えた。

理紗の生霊は動きを止め、しばらくその場に佇んでいたが次第に形が薄れて行った。それと同時に闇が払われて行き部屋に明かりが戻った。至道の顔は青ざめ、荒く息をしている。立っているのがやっとの状態だった。

諒輔はその隙に理紗が横たわるベッドに走り寄り、頭の鉄輪を取り去りながら呼びかけた。

「理紗、大丈夫か？ 眼を覚ませ！」

理紗はうめき声をあげ苦しそうな表情をしながらも、ゆっくりと眼を開けた。

「僕だよ、諒輔だ！ 分かるか？」

理紗は一旦開けた目を眩しいものでも見る様に細めていたが、目の前にあるのが諒輔の顔とやっとな認識したようであった。

「ああ、諒輔……」理紗は安堵の表情になったかと思うと、両眼に涙をあふれ出させた。

「起き上がれるかい？」

諒輔は横たわる理紗の肩の下に腕を差し入れ、上体を起こした。理紗が諒輔の首に腕を回してくると、もう片方の手を理紗の膝下に差し入れ抱き上げて部屋の中央に戻った。

「呪祖返しの法にまんまとしてやられたわ……それにしてもお熱い事だな」

いつの間にか元気を取り戻したらしく、至道が抱き合う諒輔と理紗を見て声を掛けた。

「これで俺に勝ったと思うなよ、理紗などという霊力のかけらもない者を生霊に仕立てたから不覚をとったが、今度はケタ違いに強い霊力を持っているから覚悟しろ！」

至道の叫びを聞いてこれまで沈黙を保ってきた穂来が声を上げた。

「また母さんを使う気ね、もう母さんに頼るのは止めるんじゃないの？」

「うるさい、おまえは黙っている！ 今度こそ陰の長者を仕留めて見せる」

「母さんを生霊にするのは止めて！ 母さんが生霊になるなんて、見てられないわ」

「母さんを使うのはこれが最後だ、穂来、見たくないならお前は眼を瞑っておれ！」

兄と妹のやり取りを聞いていた諒輔は抱きかかえた理紗を壁際の椅子にそっと座らせて部屋の中央に戻った。至道は理紗が寝かされていたベッドから鉄輪を拾い上げ、奥のベッドのサイの頭に載せた。サイも赤い着物を身に着けているが、身の丈に合っていて踝まで覆っている。至道は鉄輪が確り被さっていることを確かめると部屋の中央に戻り諒輔と対峙した。そんな様子を見た穂来はそれ以上言い募るのを諦め、唇を噛みしめた。部屋に緊張が一気に漲るなか、至道が呪を唱え出した。

先ほどと同じように至道の周囲から闇が広がり、部屋は溶暗に包まれて行き、一番奥のベッドに横たわるサイの身体から燐光が発せられ始めた。それと同時にサイに接続された脳波計の針が激しく動き出す。諒輔はしばらくその様子を見つめていたが、眼を閉じ、気を集中すると呪を唱え、印を結んだ。

サイの身体から生霊がじわりと滲み出る。理紗の場合はずっと浮かび上がるように現れたが、サイの場合はねっとりとした液体となって流れ出て、床に滴り落ちた。まるで血溜まりのようなそれは、ずるずると部屋の中央に流れてくると、ガス状のものを立ち昇らせ始めた。そこから放たれる妖気は尋常ではなく、部屋にいる者だけでなく、隣のホールに詰めている親衛隊員たちの心まで凍りつかせた。諒輔にもサイの力が並大抵のものではないことがひしひしと伝わって来る。

立ち昇ったガス状のものは、おぼろげながらも人形となり、頭上の鉄輪の蠟燭にも火が灯った。どうやら若い女のような姿である。徐々に形が鮮明になっていったが、その姿には見覚えがあった。真俊を襲ったあの生霊と同じである。右手に槌、左手に五寸釘を持っているのも同様であった。そしてその口から陰に籠った声が漏れ出した。

「恨めしや御身と契しその時は、玉椿の八千代、二葉の松の末かけて、変わらじとこそ思いしに、などしも捨ては果て給ふらん、あーら恨めしや」

蠟燭に照らされた顔は、早くも鬼女のものになっており、今にも諒輔に躍りかからんとするように口を大きく開け、牙をむき出した。

この時に至り、諒輔はかっと思いを開き、九字を空に切り早九字護身法を唱えた。

「臨・兵・闘・者・皆・陣・裂・在・前！」

サイの生霊は弾かれたように後方に吹き飛ばされ、形が崩れ出した。見る見るうちに皺深い老婆の姿に変身して行く。諒輔は引き貯めた両手を勢いよく突きだし、気を飛ばした。

「ぎゃあ！」サイが吠えて、くるりと向きを変えると至道の方に近付いて行く。

それを見た至道が「母さん、戻るんだ、敵は後ろだ！」と喚き、懸命に呪いを唱える。サイの生霊は息子の言葉に感応して、踏み止まり、振り返ると諒輔に歩み寄ろうとする。

「そうだ、その男が我が一族千年の怨敵、陰の長者だ」至道は絶叫する。

諒輔は近付いて来るサイとの間合いを測り、飛びかかろうとする寸前に、手をさっと祓い、気を発する。サイは悲しげな叫び声を上げると、身を振り至道の方を見やり、その場に倒れ伏した。

。

「立て！ 立つんだ……母さん俺の願いを聞いてくれ」至道が泣き叫ぶ。

サイの生霊はなんとか立ち上がり、歩もうとするがまた崩れ落ちてしまう。息子の為にあらん限りの力を尽くそうとするサイの姿は凄絶であり、悲惨であった。

突然サイの動きが停まった。脳波計、心電計などの計器類も動きを止めた。生霊の形が薄れ始める。

「母さん、どうしたんだ！ 闘いは終わっちゃいないよ」至道はオロオロ声である。

穂来が薄れゆくサイの生霊に近付き語りかける。

「母さん、もういいんだ……もう充分だよ」

サイの生霊は穂来を見上げると、掠れた声を絞り出した。

「ホキ、スマナイ……」

サイの姿はますます薄れ、部屋に明かりが戻って行く。

「生命維持装置の電源を切った……」ぽつりと穂来が呟いた。

計器のすべてが電源ランプの明かりを消し、動きを止めていた。

「何？ なんだと、穂来、お前と言うやつはなんてことしでかしたんだ！」

至道はサイのベッドに駈け寄り、その顔を覗き込んだ。

「何をしたかって？ 解き放ってあげたのさ」

「違う！ お前は母さんを殺したんだ」

至道はサイの瘦せさらばえた身体をゆすって叫ぶ。

「死んじゃ駄目だ！ 死ぬな母さん！」

身も世もなく泣き続けていた至道であつたが、突然立ち上がると諒輔を指差して叫んだ。

「こいつを殺せ、道真神威教の法敵、陰の長者を生かして返すな！」

次に穂来を指差すと「こいつは捕らえて監禁しておけ」と周囲の親衛隊員に命じた。

隣のホールに待機していた親衛隊員が特殊警棒を手に、雪崩れ込んできた。諒輔は即座に呪いを唱え、身の回りに結界を張り巡らせ理紗を引き寄せた。隊員は特殊警棒で打ちかかるが、結界に触れた警棒は弾き返される。その様子を見ていた星嶋がスーツの内側に吊るしたホルスターから

拳銃を引き抜き構えた。神崎は果敢に戦っていたが、諒輔はその腕を掴み結界に引き入れる。その時、轟音とともに拳銃が撃たれた。結界に守られた諒輔たちには、弾は当たらない。

「撃て！ 撃つんだ」至道が狂ったように叫ぶ。

至道の声に忖えて星嶋が拳銃を連射した。狭い部屋に多くの人々がひしめいており流れ弾が警備隊員の何人かを負傷させた。

「撃つのを止めろ！」「味方が負傷した！」

親衛隊員はパニック状態に陥った。その際に諒輔たちは結界に守られて室外に出る。結界を張ってれば、打撃や銃撃を跳ね返すことが出来て防御力は充分なのだが、攻撃力となるとせいぜい体当たりして相手を弾き飛ばすぐらいしかできない。その体当たりも衰弱した理紗を抱えてでは、到底相手に打撃を与えられない。今は敵に対する攻撃よりも、理紗を守り逃れ出ることだ。

エレベーターホールの前を過ぎ、迷路への通路に入り込んだ。理紗に肩を貸して進むのでその進みは緩やかにならざるを得ない。追いつかれて当然なのだが、どうしたわけか誰も追ってこないようである。行く手も窺い敵の気配がないことを確認すると諒輔は結界を解除し、「ふうー」と大きく息を吐いた。結界を張り続けることは陰の長者にとってもかなり気力と体力を必要としたのだ。

「もう大丈夫、一人で歩けるわ」

理紗は諒輔の腕から身を離すと、数歩進んだがよろけて諒輔に支えられた。ラッシュガードの上に丈の短い赤い着物を着た理紗の姿はかなり妙なものだったが、今はそんなことに構ってられない。

「無理しなくていいんだよ」

「少しふらついただけ、さぁ行きましょう」

諒輔の心配をよそに理紗は一人で歩いて行く。あわてて諒輔が先頭に立ち、次に理紗、最後に神崎という隊列で進みだした。

かなり時間がかかったが、どうやらラビリンスの出入り口に無事に辿り着くことが出来た。出入り口の扉は開いている。そっと外の様子を窺うと扉の前に何者かの後姿がある。右手にモップ、左手にバケツを下げたその姿は、以前ポルトガル村で見かけた掃除のおばちゃんのようなものである。そのおばちゃんが誰かに怒鳴られている。

「何だお前は？　そこで何をしておる？」

くぐもった声だが至道の声のようだ。

「何ってあのう、この辺りを掃除しようと……」

おばちゃんは萎縮しておずおずと答える。

諒輔は外の様子がもっとよく見える様に、首を伸ばした。

掃除のおばちゃんと対峙しているのは空気ボンベを背負い防護服に身を包んだ十名ほどの者であった。

中央の巨大な体躯の者が至道に違いない。諒輔達が迷路で手間取っている間に、エレベーター

を使って先回りしていたのだ。至道はフルフェイスのマスクを装着しているから、くぐもった声になる。それにしても敵が防護服を身に着けているというのは悪い兆候だ。

「やつらは、サリンを使うつもりかもしれない」小声で理紗と神崎に伝え、呪を唱えて再び結界を張った。

「えーい、邪魔だ、こいつを脇にどけろ」

後ろに控えていた防護服姿の者が、進み出ておばちゃんの腕を掴み引きずって道の脇に置き捨てた。おばちゃんは腰が抜けたのか、その場にへたりこみ喘いでいる。

諒輔は理紗と神崎を結果の内に入れると、三人揃って扉から外に出た。

「やっと出てきおったか、待ちかねたぞ」

「暑苦しい恰好で出迎えのようだが、熱中症にならぬよう気をつけるがいい」

「ふん、余計なお世話だ、それよりこれを見ろ」

至道は右手を差し出し、手を開いて掴んでいた物を見せた。何やら注射アンプルを大きくしたようなガラスの容器である。

「これが何だか……もう分かるな？ そうサリンだ」至道が勿体ぶって告げる。

サリンと聞いた理紗が諒輔に縋りつく。

「結界は拳銃の弾も寄せ付けないが、サリンはどうか？」至道は余裕たっぷりだ。

マスクで顔は見えないが、多分にんまりと笑ったことであろう。

「ねえ、どうなの、結界はサリンも防げるのでしょうか？」

理紗が心配そうに聞く。結界は物理的なものや霊的なものは寄せ付けないが毒ガスなど気体や化学物質から身を守られるかということ、どうも難しそうである。

「どうした、答えてやれ、サリンは結界で防げるかどうか聞いておるぞ」

答えに窮した諒輔が押し黙ると、至道は勝ち誇ったように続けた。

「式神を使おうなどと考えても無駄だぞ、わしの身体に少しでも触れたら、このガラス容器を貴様たちの足元に投げ捨てるからな、防護服を着ていない者は皆即死だ！」

諒輔は忙しく考えを巡らせた。陰の長者危機存亡の時である。このような場合は、最後の一手である守護神獣の玄武に頼るしかない。諒輔は急ぎ呪を唱え出した。しかし、この術の効果出るのは時間がかかる。理紗は動揺しながらも、諒輔が今何をしようとしているか察することが出来た。

(なんとか時間稼ぎをしなければ……)

「そこのおばちゃん……掃除のおばちゃんは関係ないでしょ、助けてあげて」

理紗が道端に座り込んだままの、掃除のおばちゃんを指差して至道に頼み込む。

「そんな時間はない、ここに居合わせたのがこの女の運の尽きだ」

「そんな！ この人はカムザの従業員でしょ助けてあげてお願い！」

「うるさい、つべこべ言うな！」

至道は吠えたとガラス容器を持つ手を大きく振り上げた。玄武はまだ現れない。万事休す、これで終わりかと観念した時、道端にへたり込んでいたおばちゃんが立ちあがるや至道に飛びかかった。そして振り上げた至道の腕を引き込むと、その手から容器を奪い取った。その動きは俊敏

であったと言う間の出来事であった。

至道たちは言うに及ばず、諒輔たちも呆気にとられてしばし動きを止めた。

「この女を取り押さえろ、サリンを取り戻せ！」至道の叫び声に、防護服を着た者の一人が進み出ると拳銃を突きつけておばちゃんに告げる。

「大人しくしろ、その容器をこちらに渡せ」

マスク越しながらも抑揚のない陰気な声には聞き覚えがあった。

「その声は社長室長の星嶋だね」おばちゃんも星嶋と察したらしい。

「おまえが、潜入捜査官だったとはな、迂闊にも気が付くのが遅れた」

「こいつが捜査官だと、ならば撃て、殺してしまえ！」至道が喚く。

星嶋はゆっくりと照準を定める。それを見た諒輔たちがおばちゃん……いや捜査官を結界に引き入れようと慌てて駆け寄ったその時、耳をつんざく拳銃の発射音がした。

（捜査官が撃たれた！）と諒輔は唇を噛みしめた。

しかし意外や手を血で赤く染めているのは星嶋の方で、手にしていた拳銃は地面に転がっている。拳銃を撃ったのは捜査官で右手に拳銃、左手にサリンの容器を握っている。どこかに隠し持っていた拳銃を素早く引き抜いて星嶋の手を撃ったようだ。さすが警視庁随一の凄腕の捜査官である。

「動く撃つ！」捜査官が凜とした口調で言い放ち、拳銃を防護服の一団に向けて牽制した。地面に転がった拳銃は神崎が進み出て拾い上げる。

「待て、撃つな！ 抵抗はしないから防護服を脱がしてくれ、暑くてかなわん、死にそうだ」

至道はフルフェイスのマスクをかなぐり捨て、真っ赤に上気した顔を露わにした。30度を超える日差しの下で密閉式の防護服を着続けるのはもう限界であったのだろう。至道以外の者もマスクと背負った空気ボンベを取り外し、防護服を脱ぎ始める。手に負傷した星嶋は他の者に手伝って貰いながらであったが、それにしても皆、緩慢な動作であった。

「防護服を脱いだら、観念してその場に跪きなさい、さあ早く！」

捜査官に怒鳴られて跪いた至道であったが、にやりと笑い告げた。

「さあて、観念するのはどちらかな？」

至道は不敵な表情をすると、顎をしゃくってラビリンスの裏手に通ずる方角を指し示した。諒輔たちが示された方を振り返ると、わらわらと親衛隊員が現れてくるではないか。エレベーターを使って地上に出て来た隊員であろう。至道は防護服を脱いでいる間に、仲間を無線で呼び寄せたのだ。更にホテル棟の方からも隊員が駆け付けてくる。

このままでは圧倒的多数の敵に囲まれてしまうに違いない。一難去ってまた一難である。諒輔は改めて玄武の出現を促すために呪を唱えた。この間に理紗は捜査官に近付き結界の内側に入るよう促す。諒輔、理紗、神崎それに捜査官の四人は結界の中にいるが、次々に集まる親衛隊員に囲まれてしまった。駆け付けた隊員は銃器を所持しており、その内の何人かは至道の命令を待たず発砲したが結界に守られた諒輔たちには当たらない。しかし十重二十重に取り囲まれてしまった今、逃げることも出来ず進退極まってしまった。

玄武はまだ現れない。いつもぎりぎり切羽詰まらなければ出現してくれない玄武であるのは先

刻承知だが、それにしてもじれったい。頼りになるのは結界だが、実はそういつまでも張り続けることは出来ない。というより、気力も体力もすでに限界に近い。

（頼むよ玄武、現れてくれ！）諒輔が心の中で悲鳴をあげたその時……

「来たわ！ ほら聞こえるでしょ」捜査官が空の彼方を眺めて叫んだ。囲んだ者達の叫び声で気が付かなかったが、確かに何かの音が空の彼方から近付きつつある。その音は次第に大きくなり、いまや轟音となって迫ってきた。諒輔たちと取り囲む者たちの全員が上空を見上げる。

遡ること三十分程前、警察庁の日野が搭乗するヘリコプターが石垣島空港を離陸した。搭乗ヘリはUH60JA、通称ブラックホーク、その後に輸送ヘリUH47チヌークが続く。チヌークは機体の前後に回転翼がある大型のヘリで搭乗しているのは警視庁の特殊急襲部隊とNBCテロ対応専門部隊の混成チーム50名であった。特殊急襲部隊はSpecial Assault Teamの略称のSATとして一般に知られているが、その任務は重大テロ事件、銃器等の武器を使用した事件等への対処である。またNBCテロ対応専門部隊とはNBC（Nuclear：核兵器、Biological：生物兵器、Chemical：化学兵器）を使用したテロが発生した場合に、迅速に現場に臨場して、原因物質の除去、被害者の救助、避難誘導等に当たることを任務としている。道真神威教に対するサリン防止法及び銃刀法違反容疑の強制捜査の為に特別に編成されたこれらの部隊を指揮するのが警察庁警備局参事官の日野であった。

それにしても、ここまで準備するのは並大抵ではなかった。強制捜査の令状を裁判所から得るのが先ず第一の関門であったが、潜入捜査官の資料に加え、諒輔から送られてきた道真神威教の地下施設の写真を添えることにより取得することが出来た。次に問題になったのが、捜査部隊の編成である。道真神威教は銃器で武装しているうえに、サリンなどの毒ガスを所有している可能性がある。通常の警察組織ではとても対応できない相手である。警察庁の上層部には自衛隊の協力を仰ぐべきだとの意見もあったが、日野は警察組織内の特殊急襲部隊とNBCテロ対応専門部隊を動員することで対応可能と主張し、最終的にこれが認められた。最大の問題は輸送手段であった。南海の孤島のような西神坐島に、強制捜査部隊をどうやって運ぶかという難問である。当初は大量に人員と資材・車両が運べる船舶を使うことが検討されたが、それでは時間がかかり過ぎる。諒輔たちの潜入を支援するために秘密捜査官はかなり危ない橋を渡っており、身元がばれる危険に晒されていたのだ。日野はヘリで強襲するしかないと、警察庁長官や内閣官房長官に訴えてやっとのことでこの作戦の実施となったのであった。諒輔から理紗が拉致されたと聞き、急遽出撃体制を整えることが出来たのは、そのような準備がほとんど済んでいたからであった。

ヘリは陸上自衛隊沖縄基地の第十五飛行隊のものである。警察にも小型のヘリはあるが、五十人もの人員を輸送できる大型ヘリは自衛隊しか保有していない。そのため輸送作戦の指揮は陸上自衛隊の飛行隊長が行うことになっていた。万一の敵の反撃に備え、UH60JAには重機関銃を装備し自衛隊の銃手を同乗させての出撃である。最近のテロ組織は携帯型の対空ミサイルを所有していることも珍しくないで、機銃で武装することは決して過剰な対応ではなかった。

事前の自衛隊との打ち合わせでは、今日の気象条件には問題なく目的地の上空に達することは可能だが、ヘリが着陸できるかどうかは、現地の地形や広さ及び敵の妨害などを確認しないと何

とも言えないとの自衛隊側の説明であった。着陸出来ない場合は、特殊急襲部隊をロープで降下させねばならない。

向かう先は西神坐島ラムザリゾート。秘密捜査官から発信されるGPS情報は、捜査官の現在位置が古代遺跡ラピンスの前に居ることを告げている。

特徴ある西神坐島の島影がどんどん近付いて来る。

「前方山の中腹にカムザリゾートのホテル棟が視認できます」

副操縦士席の飛行隊長がヘッドホンを通して話しかけて来た。

「了解！」日野は返答するとマイクを握った。

「総員警戒態勢に入れ、間もなく目的地上空、SAT部隊降下準備」

ホテル棟が眼下に見えて来た。

「CH60とCH47だ」神崎が飛来してくるヘリコプターをみて叫ぶ。ヘリは爆音を轟かせて頭上を通り過ぎたが、中型ヘリはすぐに戻って来ると上空を旋回しだした。上空を過ぎる時の風圧と騒音が凄まじい。ヘリのドアには機銃が装備されているのが見える。大型輸送ヘリは大きく回ってホテル棟の方に戻って行く。

「撃て、撃ち落としてみえ」

ヘリの騒音に負けまいと至道が狂ったように絶叫する。警備員たちは低空を旋回するヘリに向けて、一斉に銃を発砲するが防弾仕様になっているのであろう、命中しても跳ね返されてしまう。

大型ヘリはカムザリゾートの駐車場と思われる上空でホバリングしながらロープで武装要員を次々に降下させている。

「あれは警察の特殊急襲部隊SATでしょう」

神崎が諒輔と理紗に解説する。捜査官は満足げに大きく頷いている。頭の三角巾と眼鏡を外した捜査官の顔は意外と若々しい。上空のヘリがホバリングしながら拡声器を使って呼びかけを始めた。

「これより、サリン防止法及び銃刀法違反容疑で道真神威教とその施設に対し強制捜査を開始する。無駄な抵抗を止め、武器を捨て直ちに投降せよ。繰り返す、武器を捨て直ちに投降せよ」

拡声器で声が割れているが、日野の声であることが分かる。

「日野さんだわ、日野さんが助けに来てくれたわ」

丈の短い着物を脱ぎ捨てる余裕もないまま、相変わらず妙な姿の理紗が興奮して叫びながらヘリに向かって手を振った。

「怯むな、撃て、撃ちまくれ！」

至道に叱咤激励された親衛隊員たちが、上空のヘリに銃を乱射する。猛烈な射撃にヘリは一旦退くかに見えた。

一方上空の日野は、性懲りもなく撃ちかけてくる相手に業を煮やして機銃の銃手に命じた。

「威嚇射撃用意！」

銃手が機銃に取り付く、ヘリは急旋回すると低空で警備隊員たちの頭上に迫った。

「威嚇射撃、撃て！」

機銃が火を噴き、警備隊員の周囲の地面に土煙があがり、銃痕が走った。ジャングルの樹木が銃弾に枝葉を吹き飛ばされる。眼下の親衛隊隊員たちは、機銃の威力に圧倒されたのであろう右往左往している。

「投降すれば罪が減ぜられる。武器を捨て投降せよ、直ちに武器を捨て投降せよ」

威嚇射撃をして一旦通り過ぎたが、またラビリンスの広場の上空に戻ると拡声器で呼びかけた。この呼びかけが功を奏したのか、親衛隊隊員たちは銃を捨て、ジャングルに逃げ込み始めた。隊員が四散した後の広場は意外と広い。

「何とかこの広場に着陸出来ませんか？」

日野が機内無線で飛行隊長に問いかける。

「ラジャー、やってみましょう」

ヘリは着陸態勢に入った。

「戻れ！ 戻って戦え！」

至道が叫ぶが、パニック状態の親衛隊員は誰ひとり言うことを聞こうとしない。至道の回りには誰もいなくなり、至道一人が広場の中央で立ち尽くしていた。星嶋の姿もいつの間にやら消えている。至道はがっくりと地面に膝を落とした。その頭上に灼熱の陽の光が容赦なく降り注ぐ。

ヘリが砂埃を巻きあげ、轟音と共に着陸した。その後方、ホテル棟に通じる道からは防弾服に身を包んだ特殊部隊が駆けこんで来る場所であった。

諒輔はというと、気力体力が限界に達しようとしていた。結界の燐光が薄れ、諒輔は地面に崩れ落ちた。

「諒輔、確りして」

理紗がしゃがみ込み、心配そうに諒輔の頬を撫でた。神崎と捜査官も同様にしゃがみ込み諒輔を見つめる。

「あっ！ 何をする」

その時声を上げたのは捜査官であった。ラビリンスの建造物の物陰から現れた星嶋が走り寄り、捜査官を突き飛ばして、握っていたガラス容器を奪ったのだ。諒輔が弱り結界が消滅する機会を窺っていたのだろう。

「これを見る！ サリンだ！」星嶋がガラス容器を持った左手を上げて叫んだ。広場に集結し至道の周囲を取り囲んでいた特殊部隊員たちの動きが止った。近くにいる神崎、捜査官も星嶋が手にしたサリン容器を見てその場に立ち竦む。

「いいか俺に触れたらこれを投げつける」

星嶋の声を聞いた至道が立ち上がり両手を星嶋の方に差し伸べた。

「星嶋、よくやった。さすがわしの一番弟子、さあそれを持ってこちらに來い」

至道の言葉に導かれるように星嶋が広場の中央に歩みを進めた。その反対側の特殊部隊員の垣垣をかき分ける様にして前面に出て来たのは日野である。

「よく聞け、お前たちは完全に包囲されている。しかもここは陸から遠く離れた島だ。逃げることは絶対できない。観念してその容器を渡せ」

星嶋は負傷した右手をだらりと下げ、時々よろけながらも至道のもとに辿り着くと、サリン容器を至道に手渡した。

「逃げようなどとは思わん。かくなる上はたらちね様が待つ永遠の王国に行くまでだ。ここにおる者共全員を道連れにな！」

至道は星嶋の肩を左手で抱き、その顔を覗き込む。星嶋が頷くのを見て至道はサリン容器を持つ右手を大きく振り上げた。

「待て、待つんだ！」

日野の絶叫も空しく、至道の手からサリン容器が空に向かって放り投げだされ、陽の光にキラキラと煌めきながら放物線を描いた。

そして、容器は地面に落ちた。

居合わせた誰もが息をのみ容器が落ちた地面の一点を見つめていた。サリンの容器が割れ悲惨な事態になることを全員が想像し戦慄したが、不思議なことに容器は割れずに地面に転がっていた。

一瞬の静寂後、特殊部隊員が喚声を上げて至道と星嶋に殺到し、その身柄を拘束した。日野は進み出て地面にしゃがみ込み、サリン容器を見つめ首を捻っていたが、NBCテロ対応専門部隊に容器の回収を指示した。

そんな様子を諒輔は半身を起して眺めていた。気力と体力を使い果たし何も出来ない自分が情けなく、容器が放り投げられた時は絶望に打ちのめされた。しかしサリン容器が地面に落ちるその一瞬、地中から何かが現れ容器を啜えたのを見たのだ。

「玄武だ！」絶望から一転して歓喜の声を上げた。

「私にも見えたわ、また玄武が助けてくれたのね」理紗は感激で涙が溢れ止まらない。

そんな理紗の顔がぼやけて、諒輔の意識は薄らいでいく。安心した途端に緊張の糸がプツリと切れたのだ。

諒輔が意識を回復したのは東神坐島の診療所のベッドの上であった。ずっと付き添っていてくれた理紗の話によれば一昼夜眠り続けていたらしい。気力と体力を限界まで使い果たしたので意識が戻るのに時間を要したのであろう。それでもまだ回復は充分と言うわけではなく、更に一週間程度の休養が必要との正剛の診立てである。理紗も一週間休暇を延長して、諒輔と一緒に東京に帰る予定になっていた。

神崎は相変わらず元気で、警察に協力して、連日現場立会など精力的に動き廻っていたが、今日は日野に要請されて石垣島の八重山署に赴いている。

至道とその一味は逮捕され、八重山署に身柄を移されて厳しい取り調べを受けている最中である。サリン防止法の他いくつもの法律違反容疑で起訴され、重い刑罰が科せられる見込みである。

穂来とその秘書の掛川は、ラビリンスの地下施設で監禁されている状態で警察当局に発見された。シュラ・コンサルタンツの関係者であることから、至道一味との共謀が疑われたが、その後の調べで事件への関与性が薄いことが判明し、自由の身となって既に帰京している。

ところで不思議なのはサイの遺体が見つからないことであった。正剛はじめ関係者の証言で、警察当局は植物人間状態のサイがたらちねの間のベッドに寝かされていたことを把握していた。しかしラビリンスの施設や迷路、ホテル棟の内部は言うに及ばず、周辺の密林まで徹底的な捜査が行われたが、その遺体は遂に発見することが出来なかったのである。

道真神威教の残存信者の間では、サイは死んではおらず蘇り、本当の神になったとの風説が早くも流れているとのことであった。サイが神格化されることは、今後に禍根を残すと日野は言うが、“なんくるないさー”それほど心配することもないだろう。

諒輔と理紗が東京に帰る日、東神坐島の北港は大勢の人で溢れかえっていた。三線を弾く者、指笛を吹く者、カチャーシーを踊り者、そんな人々に混じって、正剛、富紀、真俊、拓馬、結衣、ユタのおばあそれに駐在の姿もある。

高速連絡船が動き出す。デッキに立った諒輔と理紗は人々に手を振った。見送りの人々から喚声があがる。コバルトブルーとエメラルドグリーンで彩られたサンゴ礁の海を白い航跡を残して船は進んで行く。島影が遠ざかる。今日も八重山地方は快晴だ。

裏土御門 陰の長者 第二話 「呪殺鉄輪の法」

<http://p.booklog.jp/book/68282>

著者：虹岡 思惟造

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/oadas/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/68282>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/68282>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ